

石見銀山

Iwami Ginzan Silver Mine Site

- 石銀地区 墓I・墓II東・墓III東・
墓IV・墓Vの石造物調査 —
- 栃畠谷地区 字甚光院の石造物調査 —

平成27(2015)年3月

島根県教育委員会・大田市教育委員会

序

石見銀山遺跡は、平成19年に「石見銀山遺跡とその文化的景観」として世界遺産に登録されました。また、平成22年度にはより充実した保護を目指すため資産の範囲が拡大されました。

島根県と大田市は、平成9年から石見銀山遺跡について発掘調査や文献調査など総合的な調査を行っており、これらの成果は世界遺産登録に実を結ぶこととなりました。そして、登録後も引き続きその価値を高めるために調査を継続しているところであります。石造物調査もこの総合調査の一環として当初から取り組んでいるものであり、これまでに銀山400年の歴史の一端を明らかにしてきました。

本書は、平成26年度に実施した、石見銀山遺跡の石銀地区と柄畠谷地区字甚光院における石造物悉皆調査の成果を報告するものです。

石銀地区は、石見銀山では古くから鉱山開発が行われたところであり、これまで発掘調査により戦国時代末から江戸時代前期には鉱山町が形成されていたことが明らかにされています。今回の石造物調査によって同地区全体での墓地・石造物の様相を把握することができ、発掘調査成果とあわせて鉱山町の変遷を探る手掛かりが得られました。

また、柄畠谷地区字甚光院は浄土宗寺院に関連する墓地で、16世紀末から近代かけての石造物の様相や土地利用の変遷が明らかになりました。

この調査に際して御協力いただきました関係各位に厚くお礼を申し上げますとともに、本書が今後の調査研究のみならず、遺跡の保護や整備活用、さらに歴史学習において広く活用していただければ幸いです。

平成27年3月

島根県教育委員会

教育長 藤原孝行

例　　言

1. 本書は、石見銀山遺跡総合調査の一環として実施した石造物調査の報告書である。

2. 調査した場所は以下のとおりである。

平成26年度 石銀地区 墓Ⅰ（大田市大森町字今宮の前イ1607外）
墓Ⅱ東（大田市大森町字竹田北平北向山イ1627-1外）
墓Ⅲ東（大田市大森町字千疊敷南向山イ1621）
墓Ⅳ（大田市大森町字石銀葉師ノ段ホ409外）
墓Ⅴ（大田市大森町字石銀横道ノ上エホ407）
柄畠谷地区 字甚光院（大田市大森町字甚光院ホ400-2、ホ402-1）

3. 調査は次の組織で実施した。

石見銀山遺跡調査専門委員会

井上 雅仁（島根県立三瓶自然館学芸課課長代理）
大橋 泰夫（島根大学法文学部教授）
勝部 昭（元島根県教育委員会教育次長）
黒田 乃生（筑波大学大学院人間総合科学研究科准教授）
田辺 征夫（公益財団法人大阪府文化財センター理事長）
中西 哲也（九州大学総合研究博物館准教授）
仲野 義文（石見銀山資料館館長）
原田洋一郎（東京都立産業技術高等専門学校准教授）
村上 隆（京都美術工芸大学教授）

事務局（平成26年度 島根県教育委員会文化財課）

野口 弘（文化財課長） 松本 洋子（世界遺産室長）
熱田 貴保（同主席研究員） 柳原 幸春（同企画員） 内田 克己（同企画員）
田原 淳史（同企画員） 東山 信治（同専門研究員） 矢野健太郎（同主任研究員）
小杉紗友美（同嘱託）

石造物調査指導者

田中 義昭（元島根県文化財保護審議会委員）
池上 悟（立正大学文学部教授）

調査参加者

現地調査

- (調査指導者) 田中 義昭、池上 悟
(立正大学院生) 足立 佳代、玉城 雄一
(島根県教育委員会) 熱田 貴保、柳原 幸春、田原 淳史、東山 信治、矢野健太郎、
小杉紗友美
(大田市教育委員会) 中田 健一(石見銀山課長補佐)、青木 俊介(同副主任)、
山手 貴生(同技師)、西尾 克己、新川 隆、尾村 勝(同嘱託)

4. 実測図・写真・拓本等は石見銀山世界遺産センター(大田市大森町イ1597番地3)において保管している。

5. 本書の執筆・編集は東山が行った。

凡　　例

- 石造物一覧表には、石見銀山遺跡の石銀地区及び栃畠谷地区宇甚光院に存在する石造物を掲載した。
- 各石造物の規模は基本的に全高及び最大幅、墓標の幅をセンチメートル単位で掲載した。欠損している場合は残存している高さ・幅、または各部材毎の高さ・幅を掲載した。
- 銘文の欠損等は、文字の個数がわかる部分は□□、判読不明部分及び文字の存在が推定される部分は〔 〕で示し、銘文の上下が欠損して字数が不明な場合は〔(上欠)〕、〔(下欠)〕と示した。また推定できる文字は□のあとに()と表示した。
- 戒名及び名字は基本的に伏せ字で○○○とした。
- 掲載していない石造物についても実測台帳は保管し、今後の研究の資料とした。
- 写真図版及び挿図の個別番号は一覧表の番号に対応する。

本文目次

第1章 調査の目的・対象・経緯	1
第1節 調査の目的	1
第2節 調査の対象	1
第3節 調査の経緯	1
第2章 石見銀山遺跡の位置と歴史	4
第1節 石見銀山の位置と地質学的背景	4
第2節 石見銀山の歴史的背景	4
第3章 悉皆調査の概要	6
第1節 調査の経過	6
第2節 調査の方法	6
第3節 確認された石造物の概要	6
第4章 石銀地区的調査	9
第1節 石銀地区と調査の概要	9
第2節 墓Iの調査	10
第3節 墓II東の調査	13
第4節 墓III東の調査	13
第5節 墓IVの調査	15
第6節 墓Vの調査	18
第7節 石銀地区的石造物調査のまとめ	21
第5章 栃畠谷地区字甚光院の調査	24
第1節 字甚光院と調査の概要	24
第2節 南東側斜面の調査	29
第3節 南側平坦面の調査	38
第4節 字甚光院の石造物調査のまとめ	40

挿図目次

第1図 石見銀山遺跡全体図	3
第2図 石見銀山遺跡（銀山柵内・大森地区）周辺図	5
第3図 墓石分類図	8
第4図 石銀地区地形図	9
第5図 石銀地区墓I 石造物分布図	11
第6図 石銀地区墓I 石造物実測図	12
第7図 石銀地区墓II東 石造物分布図	13
第8図 石銀地区墓II東 石造物実測図	13
第9図 石銀地区墓III東 石造物分布図	14
第10図 石銀地区墓III東 石造物実測図	14
第11図 石銀地区墓IV 石造物分布図	15
第12図 石銀地区墓IV 石造物実測図（1）	16
第13図 石銀地区墓IV 石造物実測図（2）	17

第14図	石銀地区墓V 石造物分布図	18
第15図	石銀地区墓V 石造物実測図（1）	19
第16図	石銀地区墓V 石造物実測図（2）	20
第17図	石銀・本谷地区周辺の石造物群位置図	22
第18図	石銀・本谷地区周辺における石造物点数の変遷	23
第19図	柄畠谷地区字甚光院付近の字切図（明治22年：一部加筆）	24
第20図	柄畠谷地区字甚光院周辺地形図	25
第21図	柄畠谷地区字甚光院全体地形図	26
第22図	柄畠谷地区字甚光院南東側斜面・南側平坦面石造物分布図	27・28
第23図	柄畠谷地区字甚光院区割図	29
第24図	柄畠谷地区字甚光院 南東側斜面 石造物実測図（1）	30
第25図	柄畠谷地区字甚光院 南東側斜面 石造物実測図（2）	31
第26図	柄畠谷地区字甚光院 南東側斜面 石造物実測図（3）	32
第27図	柄畠谷地区字甚光院 南東側斜面 石造物実測図（4）	33
第28図	柄畠谷地区字甚光院 南東側斜面 石造物実測図（5）	35
第29図	柄畠谷地区字甚光院 南東側斜面 石造物実測図（6）	36
第30図	柄畠谷地区字甚光院 南東側斜面 石造物実測図（7）	37
第31図	柄畠谷地区字甚光院 南東側斜面 石造物実測図（8）	39
第32図	柄畠谷地区字甚光院 南側平坦面 石造物実測図	39
第33図	柄畠谷地区字甚光院における石造物点数の変遷	41

表目次

第1表	石銀・本谷地区周辺の石造物組成表	22
第2表	柄畠谷地区字甚光院の石造物組成表	41
第3表	字甚光院付近の土地利用の変遷概念	42
第4表	石造物一覧表	45

写真図版目次

図版 1	石銀地区墓I 石造物	図版 8	柄畠谷地区字甚光院の石造物（2）
図版 2	石銀地区墓II 東石造物	図版 9	柄畠谷地区字甚光院の石造物（3）
	石銀地区墓III 東石造物	図版10	柄畠谷地区字甚光院の石造物（4）
図版 3	石銀地区墓IV 石造物	図版11	柄畠谷地区字甚光院の石造物（5）
図版 4	石銀地区墓V 石造物（1）	図版12	柄畠谷地区字甚光院の石造物（6）
図版 5	石銀地区墓V 石造物（2）	図版13	柄畠谷地区字甚光院の石造物（7）
図版 6	柄畠谷地区字甚光院 南東側斜面近景	図版14	柄畠谷地区字甚光院の石造物（8）
	柄畠谷地区字甚光院南東側斜面	図版15	柄畠谷地区字甚光院の石造物（9）
	石造物分布状況	図版16	柄畠谷地区字甚光院の石造物（10）
図版 7	柄畠谷地区字甚光院の石造物（1）		

第1章 調査の目的・対象・経緯

第1節 調査の目的

石見銀山遺跡は中世から近世（特に戦国時代から近世初頭）、さらには近代へと長期間にわたって形成された遺跡である。石見銀山遺跡では開発から閉山に至るまでに、繁栄期・停滞期・衰退期・近代復興期のあったことが明らかになってきているが、この歴史過程を遺物や遺構といった考古学的事実に即して詳細に明らかにするとともに、さまざまな側面から鉱山遺跡としての特性を把握することにより、石見銀山の実態に迫ることが求められている。

本遺跡における石造物調査は、銀山の開発に関わった人々の信仰や葬送儀礼、社会の営みとその変遷の一端を明らかにすることを目的として実施している。

第2節 調査の対象

一概に石造物といっても①墓碑・石塔・石仏などの信仰関連石造物、②石臼や要石などの生産関連石造物、③街道沿いの道標などの交通関連石造物、④石切り場など生産地・流通関連石造物、など多種多様なものが認められる。それら全てが石造物調査の対象となることは言うまでもないことがあるが、現実には限られた時間・人員等の制約も多く、全てを調査することは困難である。

したがって、本石造物調査においては、埋葬関係の遺構群・遺物群の様相、すなわち墓地とそれを構成する墓石が、銀山の操業に直接または間接的に関わった武士・鉱夫・職人・商工業者とその家族等の存在ぶりを具体的に物語る資料であり、鉱山の盛衰（人口の増減等）をより直接的に反映するものと考えられることから、上記の4つの区分のうち①の信仰関連石造物を主な対象として重点的に調査を実施し、先に挙げた目的に迫ることとしている。

第3節 調査の経緯

石造物調査は、島根県教育委員会が石見銀山遺跡総合整備計画策定のために、昭和60年度に徳善寺跡などについて、天正から慶長年間の紀年銘が存在する墓石を中心に一部の確認調査を実施したことから始まっている。

平成9・10年度には石見銀山遺跡総合調査の一環として石造物調査が実施されることとなり、仙ノ山山頂周辺の石銀地区と龍源寺間歩上・妙本寺上墓地の調査が実施された。この調査では、石造物のグルーピングを心かけ各群の規模と石造物の種類、あるいはその消長を押えるため、紀年銘がある墓石の調査が重点的に進められたが、墓石調査地の選定を発掘調査と連携した結果、天正や文禄年間の紀年銘のある墓石が発見され、古い墓石の存在する地区は生活していた時期も古い可能性が高いことが明らかになり、発掘調査箇所の選定にも有効であることが判明した。

こうした石造物調査の有効性が確認されたことから、調査の継続と計画の必要性が、石見銀山遺跡発掘調査委員会により指摘され、平成11年度からは以下の3つの調査を総合的に行うこととなつた。

- ①鉱山全体の石造物の傾向や変遷を把握し、悉皆調査の必要な箇所を判断する材料を得るために分布調査。
- ②特徴的な墓地において構造や変遷を把握するための詳細な悉皆調査。
- ③発掘調査等で得られた成果と関連付けるため、発掘調査地周辺の石造物やその他の資料について関連調査。

これら3つの調査のうち悉皆調査については、①銀山地区・大森地区に位置する、②群としてのまとまりが明確に把握できる、③アクセスが容易である、④調査環境が比較的よいなどの条件を満たした墓地のうち、重点的に本遺跡の最盛期と言われている戦国時代から江戸時代前半の墓地を選

び、継続的に調査する計画をたてた。

この方針に基づき、石造物調査は平成11年度から分布調査・悉皆調査・関連調査の組み合わせによって行われるようになり、妙正寺跡の悉皆調査を皮切りに6箇所の寺院墓地を中心とする調査、及び銀山柵内・大森地区の分布調査が実施された。これらの調査成果については、既に報告書が刊行されている。

平成16年度にはそれまでの調査成果をまとめ、検討を加えた報告書も刊行され、銀山柵内・大森地区における石造物調査は一定の成果を得るに至っている。

その後、平成17年度からは港や街道など周辺部における石造物の実態を把握するため、温泉津地区における調査が開始されることとなり、これまでに恵院寺、西念寺、金剛院、極楽寺の悉皆的調査と分布調査が行われた。なお、温泉津地区での石造物調査は、温泉津伝統的建造物保存対策調査や港湾調査、街道調査の際に実施されている。

平成22～23年度は、以前に分布調査を行っていた石銀地区の悉皆調査を実施した。石銀地区は石見銀山に於ける初期鉱山業の中心の一角であり、墓II・III・IVの悉皆調査を通して、代官墓・奉行墓にも匹敵する規模の石塔群が樹立されていることが判明した。石銀地区的歴史的評価を行う材料は石造物調査からも着々と提供される段階となっている。

平成24年度は、平成24～25年度の落石防護柵設置予定地に本經寺墓地があり、多数の石造物が存在することが確認されたため、予定を変更して急速こちらの調査を実施した。

平成25年度についても柄畠谷地区の市道大森三久須線の治山事業対象地である字甚光院周辺に石造物がまとまって存在することが確認されたため緊急的に悉皆調査を実施した。

また、大谷地区の高橋家（石見銀山御料銀山町年寄山頭廻宅）裏の要害山南麓では、災害防止事業の対象地内に石塔が数基確認されたため調査を行った。

落石対策事業等の緊急調査以外に、清水谷地区本法寺跡の門脇家墓所及び下河原天満宮跡の石造物調査でまとまった成果があったので附編として掲載した。

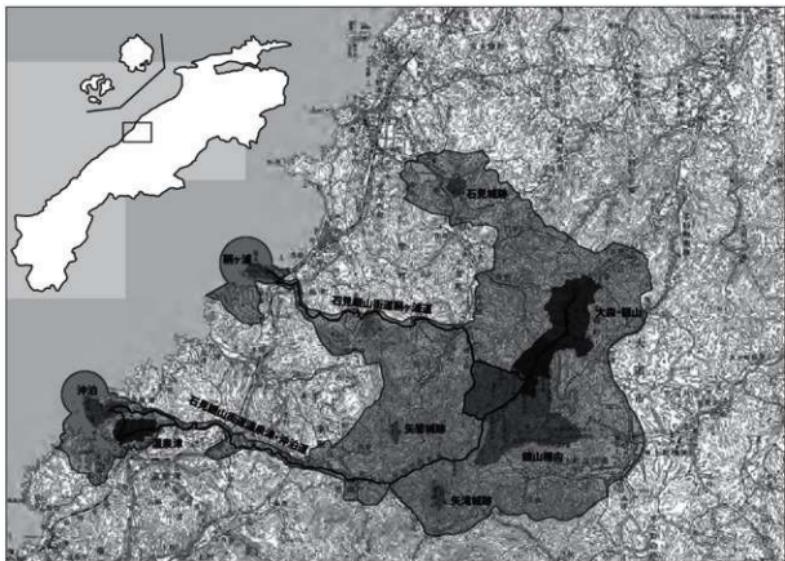
平成26年度は、石銀地区の全容を明らかにするため、同地区で未調査であった、墓I、墓II東、墓III東、墓IV、墓Vの悉皆調査を行った。

また、柄畠谷地区字甚光院についても、平成25年度調査地に隣接しながらも未調査であった南東側斜面と南側平坦面で悉皆調査を行い、墓群全体の様相を把握することとした。

【参考文献】

- 1 島根県文化財愛護協会1986『石見銀山関連遺跡分布調査報告』
- 2 島根県教育委員会他1999『城跡調査・石造物調査・間歩調査編』『石見銀山』第3分冊
- 3 島根県教育委員会他1999『民俗調査・港湾調査・街道調査編』『石見銀山』第6分冊
- 4 温泉津町教育委員会1999『1999 温泉津』
- 5 島根県教育委員会・大田市教育委員会2001『石見銀山遺跡石造物調査報告書1—妙正寺—』
- 6 島根県教育委員会・大田市教育委員会2002『石見銀山遺跡石造物調査報告書2—龍昌寺跡—』
- 7 島根県教育委員会・大田市教育委員会2003『石見銀山遺跡石造物調査報告書3—安養寺・大安寺・大龍寺跡・奉行代官墓附外—』
- 8 島根県教育委員会・大田市教育委員会2004『石見銀山街道一耕作浦・温泉津沖泊道調査報告書—』
- 9 島根県教育委員会2004『石見銀山街道一長樂寺跡・石見銀山附地役人墓地(河島家・宗岡家)ー』
- 10 島根県教育委員会2005『石見銀山街道一耕作浦・沖泊集落調査報告—』
- 11 島根県教育委員会・大田市教育委員会2005『石見銀山遺跡石造物調査報告書5—分布調査と墓石調査の成果—』
- 12 島根県教育委員会・大田市教育委員会2006『石見銀山遺跡石造物調査報告書6—温泉津地区恵院寺墓所—』
- 13 島根県教育委員会・大田市教育委員会2007『石見銀山遺跡石造物調査報告書7—温泉津地区的石造物分布調査と西念寺墓地悉皆調査(1)—』

- 14 島根県教育委員会・大田市教育委員会2008『石見銀山遺跡石造物調査報告書8—温泉津地区の石造物分布調査と西念寺墓地悉皆調査(2)ー』
- 15 島根県教育委員会・大田市教育委員会2009『石見銀山遺跡石造物調査報告書9—西念寺墓地(3)・安原備中墓・大光寺墓地ー』
- 16 大田市教育委員会2009『重要伝統的建造物群保存地区大田市温泉津伝統的建造物群保存地区 保存対策調査報告書(補訂版)』
- 17 島根県教育委員会・大田市教育委員会2010『石見銀山遺跡石造物調査報告書10—金剛院墓地・本谷地区周辺・中正路の石造物ー』
- 18 島根県教育委員会・大田市教育委員会2011『石見銀山遺跡石造物調査報告書11—極楽寺墓地・温泉津沖泊道周辺の石造物・石銀地区ー』
- 19 島根県教育委員会・大田市教育委員会2012『石見銀山遺跡石造物調査報告書12—仙ノ山石銀地区墓IIIの調査ー』
- 20 島根県教育委員会・大田市教育委員会2013『石見銀山遺跡石造物調査報告書13—本経寺墓地の調査ー』
- 21 島根県教育委員会・大田市教育委員会2014『石見銀山遺跡石造物調査報告書14—柄畠谷地区字甚光院の石造物調査ー』



第1図 石見銀山遺跡全体図

第2章 石見銀山遺跡の位置と歴史

第1節 石見銀山の位置と地質学的背景

島根県は、日本海に面して東西約180km余りの長い県土を持ち、古代律令制以来の旧国単位では、「出雲」「石見」「隠岐」の3国からなる。石見銀山は、このうち「石見国」の東部、いわゆる「石東」といわれる地域に位置し、現在の行政区分では大田市に所在する。

石見地域では、江の川や周布川、高津川等の河口近くに若干の平野は広がるが、海岸部まで山地が迫っており大規模な沖積平野は見られない。

石見銀山遺跡の中核をなす仙ノ山（標高538m）は、前期更新世（約100万年前）に火山活動をおこした大江高山火山群の北西部に位置している。大江高山、矢滝城山、葛子山、要害山、馬路高山などから構成されるこれらの山々は、「溶岩円頂丘」に分類され、粘性が高いデイサイトで山体が形成されている。

仙ノ山の鉱脈は、角礫火山岩やデイサイトの貫入岩体、凝灰角礫岩等を母岩とする。鉱脈には、鉱染鉱床型の福石鉱床、鉱脈鉱床である永久鉱床という2つの鉱床がある。福石鉱床の鉱石鉱物としては自然銀、菱鉄鉱を主体として、黄銅鉱などの含銅硫化鉱物をほとんど含まない。また、永久鉱床の鉱石鉱物は黄銅鉱、黄鉄鉱を主体とし、輝銀鉱、自然銀、ピスマスなどが含まれる。

第2節 石見銀山の歴史的背景

石東地域では、近年、開発事業に伴って縄文・弥生時代の遺跡の調査例が増えている。大田市仁摩町の潮川流域にある古屋敷遺跡、五丁遺跡群、川向遺跡などで縄文時代後期以降の遺物・遺構が検出された。弥生時代～古墳時代の集落跡は、大田市鳥井南遺跡や仁摩町大國の庵寺遺跡で確認されている。庵寺遺跡と同所の庵寺古墳群は石見地方で有数の規模の古墳群である。

平安時代前半期の遺跡では、綠釉陶器が出土した仁摩町殿屋敷遺跡や円面鏡が出土した大田市八

石遺跡が注目される。これらの遺跡では中世前期の貿易陶磁も出土し、河口に近い川岸に立地状況から海上交通との関連をうかがわせる。

こうした海岸部の遺跡の他に、仙ノ山から南西方向へ約1kmの地点に位置する白坏遺跡では、古墳時代の住居跡のほか、奈良・平安時代の建物跡や木簡が多数出土している。

平安時代末期には、石見銀山周辺を包括する大家荘という大規模な莊園が成立しており、その後、中世には石見銀山周辺に多くの莊園、国衙領が成立する。仁摩町天河内の白石遺跡、清石遺跡は、12～14世紀にかけて継続する遺跡で、総柱構造の主屋をもつ居宅遺構が検出されており、貿易陶磁器も一定量出土していることから、在地有力武士層の関与が考えられる。

南北朝期には、周防・長門の守護であった大内氏が石見国守護を兼任するが、応永の乱（1399）で敗れ、石見守護職を没収される。しかし、義弘の弟・盛見は、応永8（1401）年には大内氏の家督を実力で奪取し、石見国のうち邇摩郡を分郡として知行した。この分郡知行は大内政弘の代にも引き継がれた。永正年間（1504-1521）に至ると大内義興が石見一円の守護権を奪回した。

石見銀山は、『銀山旧記』では大永6（1526年）に博多の有力商人神屋寿植によって発見されたと記されている。大内氏は博多の有力商人と結び、中国との勘合貿易を独占的に行っており、大内氏の支配下で石見銀山の本格的な開発が行われるようになつた。天文2（1533）年には灰吹法が伝えられ、現地で製鍊が行われるようになり、石見銀山の産銀量は急激に増大した。

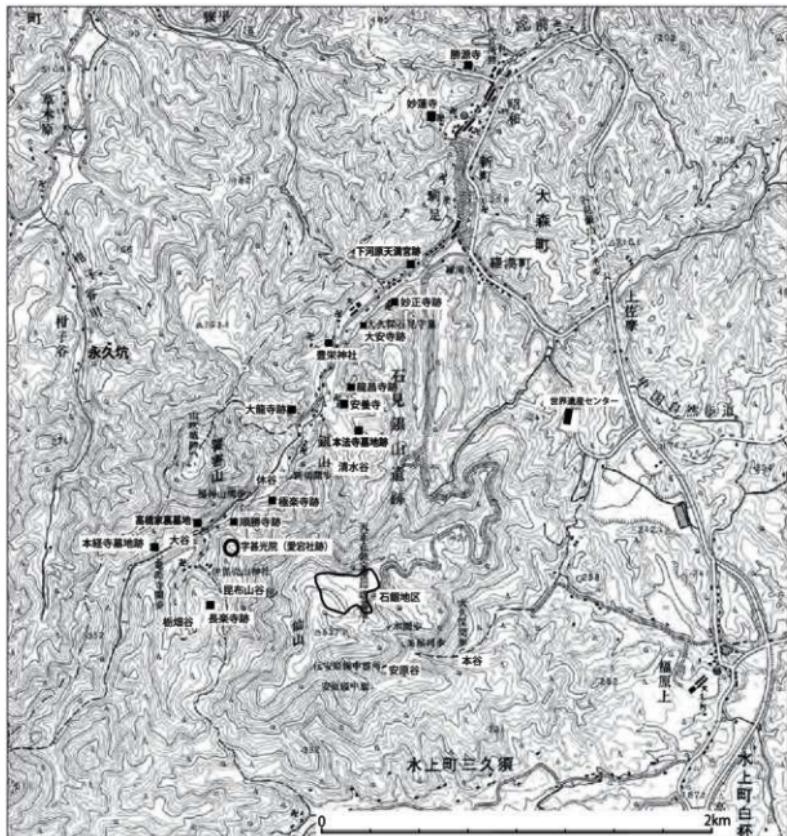
戦国期には大内氏や尼子氏、毛利氏により銀山領有をめぐる争奪戦が行われ、それに伴い多数の城館が銀山周辺や街道沿い、港周辺に造されている。1560年代前半には毛利氏が尼子氏との銀山争奪戦に勝利し、石見銀山の支配権を確立した。

江戸期に入ると、石見銀山は周辺の安濃郡・邇

摩間郡などとともに石見銀山附御料に編入され、幕府直轄領となった。江戸初期は初代奉行の大久保長安の開発により銀山は繁栄期を迎えており、この頃の年間産銀量は約10,000貫（約37.5 t）と推定されている。寛永期を過ぎると、良鉱が乏しくなったことや、坑道が深くなり湧水処理に多大な経費を要するようになったことにより、採算に合わない間歩は採掘が停止された。延宝元（1693）年以降の記録によると、産銀量は年間約

300貫（約1t）前後で推移し、幕末頃には年間約50貫（0.187t）を下回る状況であった。

明治維新後は、しばらく小規模な経営が続けられたが、明治19（1887）年に藤田組が経営をはじめ、近代的な鉱山開発が行われるようになった。近代の主要商品は銅で、明治後期から大正初期には軍需景気に乗り盛り込みた。しかし、第1次大戦後の銅価格低下を背景として大正12（1923）年に石見銀山は休山した。



第2図 石見銀山遺跡（銀山柵内・大森地区）周辺図

第3章 悉皆調査の概要

第1節 調査の経過

平成26年7月7日に、元島根県文化財保護審議会委員の田中義昭氏と立正大学文学部教授の池上悟氏を招いて、第1回目の石造物調査指導会を開催し、当年度の調査計画について検討した。石銀地区については、墓Vなど多数の石造物がありながら未調査の地点を悉皆調査することとなった。また、平成25年度に落石対策事業に伴い調査した柄畠谷地区字甚光院についても、全体像を把握するため、隣接する未調査地点（南東側斜面と南側平坦面）の調査が必要との考えに至った。こうした調査方針については、平成26年7月24・25日の調査専門委員会でも了承された。

石銀地区については、島根県教育委員会・大田市教育委員会の職員によって、平成26年8月18日～22日にかけて墓I・墓II東・墓III東・墓IV・墓Vの悉皆調査を行う計画であったが、天候不良のためこの期間内で調査を終えることができず、10月6日・8日に補足調査を行った。なお、8月22日には田中義昭氏を招いて第2回の調査指導会を開催した。

柄畠谷地区字甚光院の調査は、平成26年9月14日～16日に、島根県教育委員会・大田市教育委員会の職員のほか、立正大学・池上悟教授及び立正大学院生2名も加わって行っており、9月16日には元島根県文化財保護審議会委員の田中義昭氏も招いて第3回の調査指導会を開いた。

悉皆調査後は、図面・写真などの記録類を整理し、報告書を作成した。

第2節 調査の方法

悉皆調査にあたっては、事前に下草等の除去を行ったうえで、調査対象地における石造物の分布状況を確認し、石造物の仮番号を付けるとともに、大田市教育委員会作成の「石見銀山遺跡地形図」を基におよその地点を記録した。なお、番号は石銀地区については墓群ごとに1番から付

け、柄畠谷地区字甚光院については南東側斜面に「SE」、南側平坦面に「ST」の略称をつけ、それぞれ1番から振り分けるようにした。

悉皆調査では、各石造物について調査カードを作成するとともに、デジタルカメラで写真撮影を行った。調査カードには、実物の1/5で石造物を実測し、種類・銘文など必要事項を記入している。銘文のあるものの一部については、拓本を探っている。

石造物は、墓塔・墓標を中心カード作成をしており、台座や種別の特定できない石造物については一部を除き記録していない。

なお、柄畠谷地区字甚光院については、調査対象地に総数約400点という膨大な数の石塔が存在し、限られた調査期間で全ての石造物を実測することはできないため、全体の墓塔・墓標の分布と種別・点数を把握したうえで、17世紀代の墓塔が集中する南東側斜面の石造物の実測を優先して行い、南側平坦面については石造物の墓碑銘の記録と年代の特定できる古い墓塔を中心に実測を行うこととした。また、石造物の地点と周辺地形の測量を業者に委託し、1/100の地形図を作成している。

第3節 確認された石造物の概要

今回の悉皆調査においては、いくつかの墓塔・墓標の形式を確認しており、これらの概要について以下に記すこととした。なお、石材は、基本的に大田市温泉津町福光で産出される福光石が用いられている。

一 石宝鑄印塔

方柱状の石材を加工して、上から相輪・笠・塔身・基礎が一体に造作された墓塔である。これまでの調査で石見銀山においては、この形式が中世末期から近世初頭にかけて石造物の半数近くを占めることが明らかとなっている。石銀地区的各墓

群と柄畠谷地区字甚光院で確認している。

一石五輪塔

一石宝篋印塔と同様、方柱状の石材を加工するもので、上から空輪・風輪・火輪・水輪・地輪が一体に造作されている。一石宝篋印塔には及ばないが石見銀山遺跡では16世紀～17世紀を代表する墓塔型式の一つである。石銀地区の墓I・墓IV・墓Vと柄畠谷地区字甚光院で確認できた。

組合せ宝篋印塔

塔を構成する相輪・笠・塔身・基礎がそれぞれに造作されたもので、それらが組み合わされることにより完成する墓塔である。その特性ゆえに本来の組み合わせを維持したまま樹立しているものはないため、実数の把握は難しい。石銀地区の墓I・墓II東・墓IV・墓V及び柄畠谷地区字甚光院で確認している。

組合せ五輪塔

塔を構成する空風輪・火輪・水輪・地輪がそれぞれに造作されたもので、それらが組み合わされることにより完成する墓塔である。石銀地区墓Vと柄畠谷地区字甚光院で確認された。

無縫塔

先端部の尖った裾細りの円柱状の塔身を持つもので、通常、僧侶の墓で用いられている。石銀地区墓IVと柄畠谷地区字甚光院で確認している。

位牌型墓標

塔身の断面形は長方形で、頂部に屋根が作り付けられた墓標である。石銀地区墓Vで1基確認している。

円頂方形墓標

塔身の厚みが幅に対して小さく、頂部が丸く仕上げられた墓標である。石銀地区墓Vと柄畠谷地区字甚光院の南側平坦面で確認している。

円頂方柱墓標

塔身は厚みと幅がほぼ等しく、頂部が丸く仕上げられた墓標である。浄土真宗の墓石で多く用いられている。石銀地区墓III東・墓V、柄畠谷地区字甚光院の南側平坦面で確認している。

円頂六角柱墓標

塔身の断面形は六角形で、頂部が丸く仕上げられた墓標である。石銀地区墓IV・墓Vで確認できた。

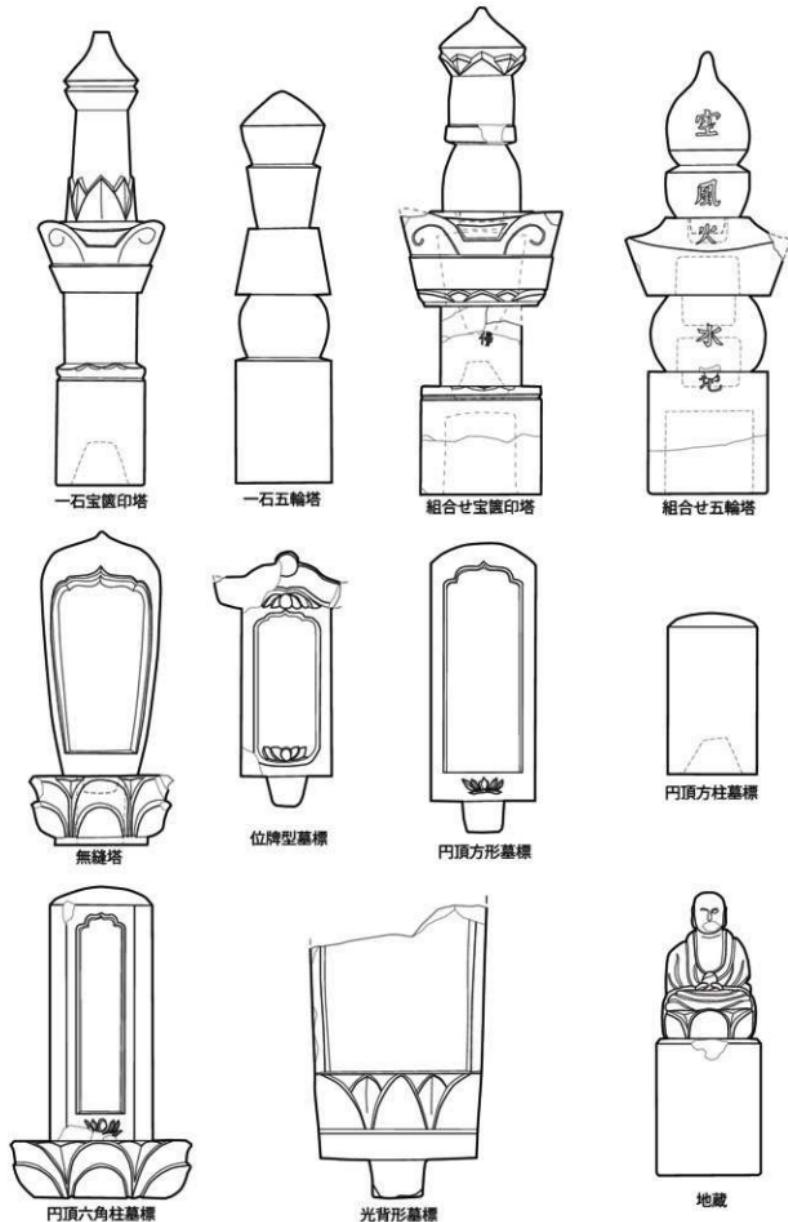
光背形墓標

仏立像の光背のように 縦長の本体の頂部が尖り、上部幅に対して下部幅が狭い形態の墓標である。温泉津町西念寺3・4号岩窟では、完形品が遺存しているが、石見銀山周辺では類例の少ない墓標形式である。17世紀初頭の限られた時期に製作されたものと考えられる。26年度の調査では、石銀地区の墓III東で1基、柄畠谷地区字甚光院で2基確認されたが、いずれも下部のみ残存するものである。

地蔵

坐像のものと立像のものに大別できる。手に宝珠を持つもの、蓮の花を持つものなど、さまざまの形態がある。石銀地区墓III東・墓IV・墓Vと柄畠谷地区字甚光院の南側平坦面で確認している。

なお、これらのほかに、柄畠谷地区字甚光院の南側平坦面で、突頂方柱墓標や平頂方柱墓標、石龕、花立を確認しているが、実測は行っていない。



第3図 墓石分類図

第4章 石銀地区的調査

第1節 石銀地区と調査の概要

1. 石銀地区的概要

石銀地区は仙ノ山山頂近くの標高460～480m付近にある広大な平坦面である。平成8～10年度に行われた発掘調査で、銀製鍊を行った可能性のある建物跡を含む建築構造や道路構造など、16世紀後半から17世紀前半の遺構群が確認され、江戸時代初期には道路の両側に家々が並ぶ鉱山町が形成されていたことが明らかになった。

こうした平坦面を取り囲むようにいくつかの小高い丘陵地が見られ、これらの尾根上や斜面部分などが墓地として利用されており、大きく7つの墓群に分けられる。

石銀地区の北東の丘陵上には墓I、ほぼ中央の独立丘陵上には墓II、墓IIから南東へのびる尾根筋状に墓II東、平坦面西側の丘陵斜面に墓III、墓

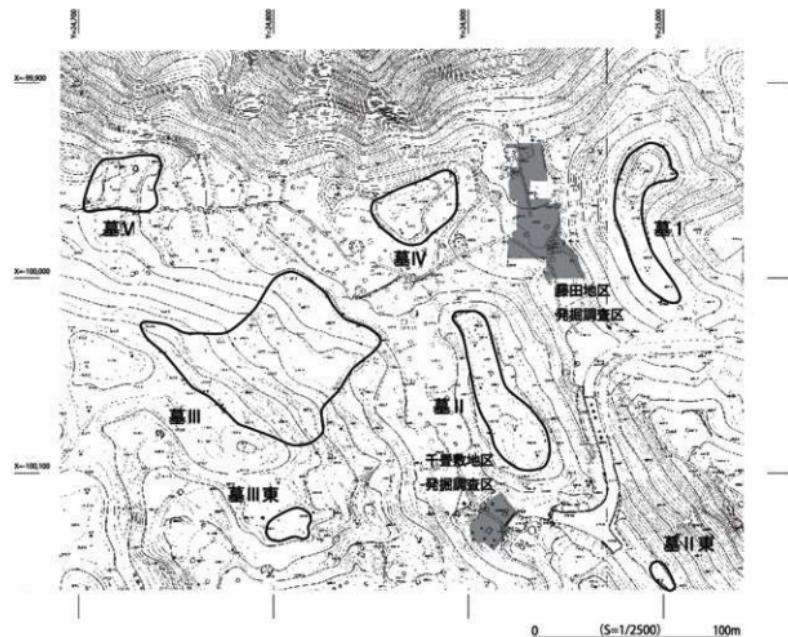
IIIの上から南東に下った尾根上の平坦面に墓IV、東、北側の小丘陵上に墓V、北西側の丘陵平坦面上に墓VIが分布している。

このように石銀地区は、銀山最盛期における景観や土地利用を考えるうえで重要な地点であり、石造物の悉皆調査の必要性が説かれていた。

2. 既往の調査

石銀地区では平成9～10年度に石造物分布調査が実施されており、グルーピングを中心とした報告がなされている（田中編1999）。

平成22年度は墓IIと墓IVで調査が行われた。墓IIでは大型組合せ宝篋印塔2基、一石宝篋印塔1基、一石五輪塔1基が確認されている。2基の大型の組合せ宝篋印塔は総高が180～190cmになると想定されるもので、石銀地区だけでなく大森集落



第4図 石銀地区地形図

を見渡せる尾根北端に構築されたマウンドに伴っていたこととあわせて、特殊な墓であったことをうかがわせる。墓IVでは一石五輪塔1基、円頂六角柱墓標1基、石塔の基礎5基が報告されているが、未調査の部分もあり、全ての墓石について記録されたわけではない（島根県教育委員会・大田市教育委員会2011）。

平成23年度には、石銀地区の中でも古層の石造物がまとまって存在する墓IIIで悉皆調査が行われた。斜面を雑壇状に造成した平坦面で、一石宝篋印塔13基、三石宝篋印塔1基、一石五輪塔2基、組合せ宝篋印塔33基、無縫塔5基の計54基分が確認されており、これらの中には復元高が200cm前後となる大型の宝篋印塔も見られる（島根県教育委員会・大田市教育委員会2012）。

3. 平成26年度の調査

平成26年度には、石銀地区の全体像を把握するため、未調査であった墓I・墓II東・墓III東・墓IV・墓Vの悉皆調査を行う計画を立てた。平成26年8月18日～22日にかけて、島根県教育委員会・大田市教育委員会の職員で調査を行ったが、天候不良の日が続いたため期間内で調査を終えることができず、10月6日・8日にも補足調査を行っている。8月22日には元島根県文化財保護審議会委員の田中義昭氏を招いて第2回の調査指導会を開催した。

今回の調査では、墓Iで一石宝篋印塔3基、一石五輪塔1基、組合せ宝篋印塔4基を、墓II東で一石宝篋印塔2基、組合せ宝篋印塔1基を、墓III東で一石宝篋印塔3基、円頂方柱墓標1基、光背形墓標1基、地蔵1基を、墓IVで一石宝篋印塔2基、一石五輪塔1基、組合せ宝篋印塔2基、無縫塔2基、円頂六角柱墓標3基、地蔵9基など、墓Vで一石宝篋印塔4基、一石五輪塔2基、組合せ宝篋印塔1基、組合せ五輪塔3基、位牌型墓標1基、円頂方形墓標8基、円頂方柱墓標2基、円頂六角柱墓標1基、地蔵1基を確認しており、既往の調査も含めて、石銀地区の主な石造物群の様相

を把握することができた。

【参考文献】

- 1 田中義昭編1999「石造物調査報告書」『石見銀山遺跡総合調査報告書 第3冊』
- 2 島根県教育委員会・大田市教育委員会2011『石見銀山遺跡石造物調査報告書11—極楽寺墓地・温泉津沖泊道周辺の石造物・石銀地区—』
- 3 島根県教育委員会・大田市教育委員会2012『石見銀山遺跡石造物調査報告書12—仙ノ山石銀地区墓IIIの調査—』

第2節 墓Iの調査

1. 石造物の分布（第5図）

墓Iは、石銀藤田地区の北東の丘陵上に位置しており、石造物は南北にのびる丘陵尾根上に点在している。

丘陵北端のピーク、標高492mの地点にはマウンド状の高まりがあり、その付近で組合せ宝篋印塔の笠（4）・基礎（5）・台座（7）が確認された。

そこから東側に一段下ったところにある小さな平坦面では、一石宝篋印塔（2）と一石五輪塔（1）が存在する。このほか組合せ宝篋印塔の相輪（3）や基礎（5）も見られるが、これらは上方から転落した可能性がある。

丘陵ピークから南に下る斜面上に組合せ宝篋印塔（8）があり、さらに下った尾根上の平坦面（標高485～487m）に一石宝篋印塔（9・10）や組合せ宝篋印塔の部材（11～13）が点在している。尾根筋には墓石のほかにも、墓の基壇もしくは墓石の代わりにおかれたと思われる集石もいくつか認められた。

2. 石造物の様相（第6図）

一石宝篋印塔は3基確認され、いずれも高さ93.5cm程度とほぼ同じ大きさである。笠の隅飾りには、2・9は蕨手状の文様を持つが、10は曲線的な縁取り線のような文様が描かれている。10は相輪から基礎にかけて「妙法」・「蓮」・「華」・「経」の文字が刻まれている。2は「明暦元年」

(1655)、9は「寛文九年」(1669)の紀年銘を持つ。

一石五輪塔は1基(1)存在する。長さ95.8cmに対し、幅20cmと小さく、かなり縦長に見える。空風輪と、火輪、水輪、地輪の最大幅がほぼ等しく、空風輪の先端は平らになっており、ほぼこの大きさの長方形の石材を最小限削り出して成形したものと推測される。「承應四年」(1655)の紀年銘を持つ。

組合せ宝篋印塔は、相輪2点、笠3点、基礎4点、台座1点が確認された。部材の数や分布から4基存在したと考えられる。

丘陵北端のピークから東側の平坦面に分布していた3~7は位置関係から同一の石塔の部材と考えられる。笠(4)には「蓮」の文字が刻まれている。特徴的なのは、基礎(5・6)の下端に段を設けて突出させ、台座(7)はこれに組み合わさるように方形の溝を彫り込んで基礎受部が作られていることである。台座の前面には方形の水入れと円孔を穿った2つの線香立てがあり、左右と背面に反花で装飾しているのも珍しい。

8-1・2は北端のピークからやや南へ下った位置にあったもので、相輪(8-1)には梵字「キヤ」が刻まれ、笠(8-2)にも梵字らしきものが見られる。

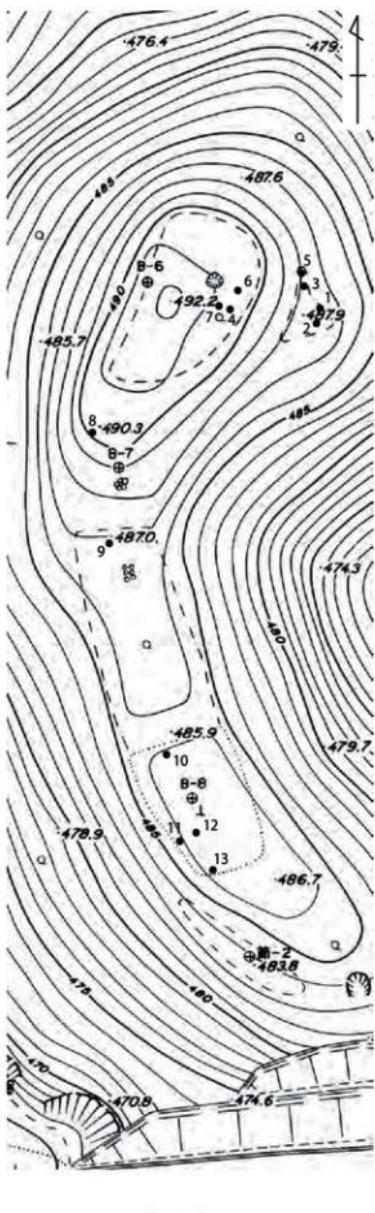
11は笠、12は基礎で、尾根上の平坦面の南寄りで確認された。12には銘文が刻まれている。

13は尾根の南端で確認された宝篋印塔の基礎で、「慶長廿」(1615)の紀年銘を持つ。

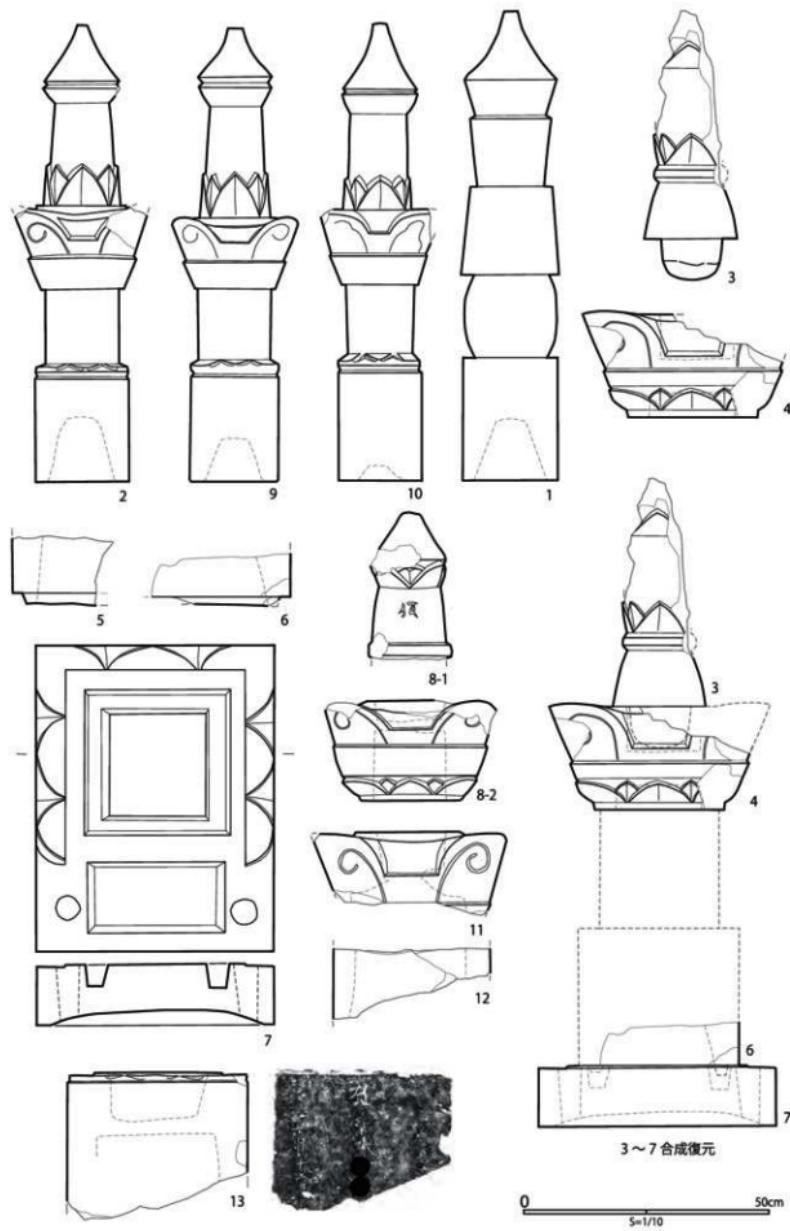
3. 墓地の性格と年代

1・2・13は「○暨」の戒名を持つことから、浄土宗の石塔と考えられる。一方で、4・10のように日蓮宗の墓石も見られることから、特定の寺院に伴う墓地ではなく、複数の造墓主体によってつくられたものと推察される。

石塔の紀年銘は、「慶長廿」(1615)から「寛文九年」(1669)までであることから、17世紀前半から後半に造墓されたと考えられる。



第5図 石銀地区墓I 石造物分布図



第6図 石銀地区墓I 石造物実測図

第3節 墓II東の調査

1. 石造物の分布（第7図）

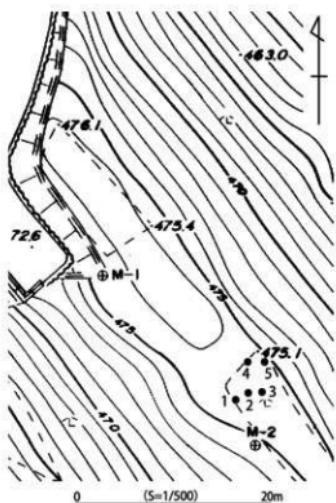
墓IIのある丘陵から南東にのびる尾根筋上で、標高475mの地点に位置している。

一石宝篋印塔2基（1・2）、組合せ宝篋印塔の笠1点（5）・基礎1点（4）、宝篋印塔の相輪1点（3）を確認した。

2. 石造物の様相（第8図）

1・2には「□永」の紀年銘があり、寛永年間（1624～1645）か、あるいは宝永年間（1704～1711）のものと考えられるが、いずれになるか決め手はない。2は相輪に「妙法」、笠に「蓮」の文字が読み取れることから、日蓮宗の墓石と判断できる。

4・5は近接した位置にあることや、規模から同一の石塔の部材であったと考えられる。3は相輪上部のみ残るものであるが、九輪下部に突帯があることから、組合せ宝篋印塔と思われる。規模からみて4・5と組み合わせる可能性がある。



第7図 石銀地区墓II東 石造物分布図

第4節 墓III東の調査

1. 石造物の分布（第9図）

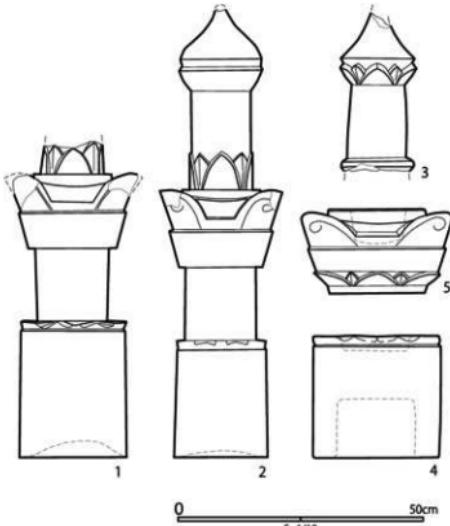
石銀千疊敷の西側の丘陵で、墓IIIの上部から南東に下った尾根上の平坦面に位置している。石造物は、標高507mの平坦面の中央に円頂方柱墓標（6）が、平坦面の南縁辺部に一石宝篋印塔2基（2・4）、光背形墓標（5）、地蔵（3）が、そこから一段下った小さな平坦面上に一石宝篋印塔（1）が確認された。

2. 石造物の様相（第10図）

一石宝篋印塔は、高さ約75cmのもの（1・4）と、高さ約90cmのもの（2）がある。1は相輪に「法」、笠に「蓮」、塔身に「華経」の文字が刻まれており、「貞享五戌辰」（1688）の紀年銘を持つ。

4は相輪から基礎にかけて、「法」、「伽」、「羅」、「薄」、「阿」の文字が刻まれ、「享保五子」（1720）の紀年銘を持つものである。

6は高さ33.5cmの円頂方柱墓標で、塔身の中央は削り込みによって棒取りされている。



第8図 石銀地区墓II東 石造物実測図

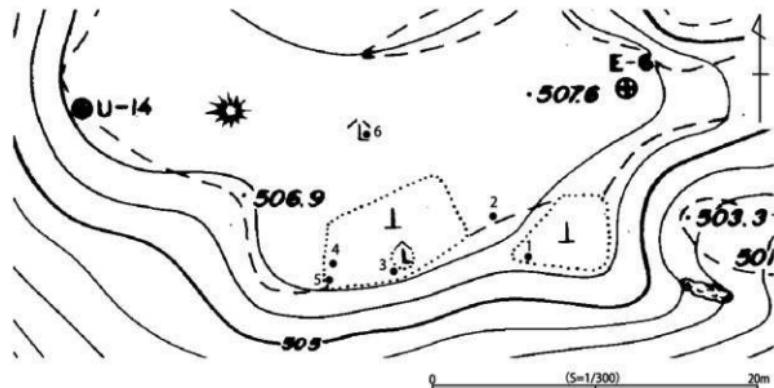
5は光背形墓標と思われるもので、下部のみ残存している。正面は、中央部を彫り込んで周囲の輪郭を浮き上がらせ、下部には間弁を伴う蓮弁が彫られている。下端にははざを持つ。

3は立像の地蔵で、蓮弁が彫られた台座や光背を伴うものである。「元禄六」(1693)の紀年銘を持つ。「童子」の戒名が刻まれており、子どもの墓に伴っていたことが分かる。

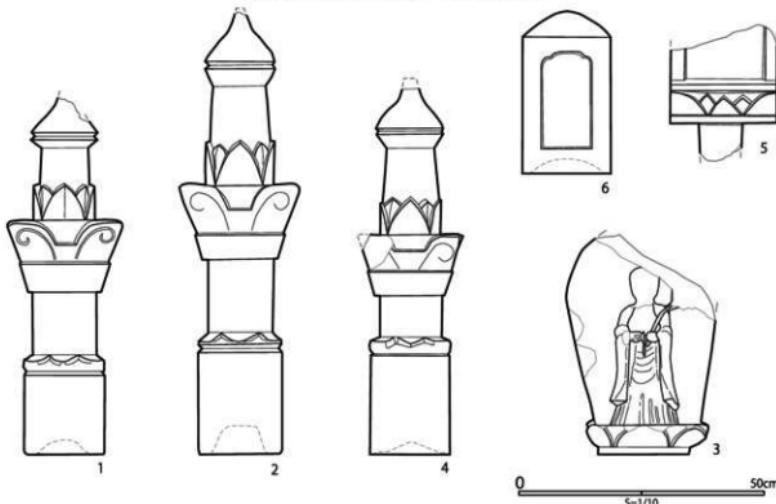
3. 墓地の性格と年代

日蓮宗の石塔（1）がある一方で、浄土真宗に特徴的な、高さの低い円頂方柱墓標（6）もあることから、特定宗派にはよらない複数の造墓主体によって営まれた墓地の可能性がある。

紀年銘石造物から、造墓時期は17世紀後葉～18世紀前葉頃と推測されるが、光背形墓標の存在から、これよりさかのぼる時期から墓地が営まれていた可能性も考えられる。



第9図 石銀地区墓Ⅲ東 石造物分布図



第10図 石銀地区墓Ⅲ東 石造物実測図

第5節 墓IVの調査

1. 石造物の分布（第11図）

墓IVは石銀地区の北側の小丘陵状に位置しており、石造物は丘陵頂部と南側に一段下がった平坦面（中段平坦面）、さらに一段下がった平坦面（下段平坦面）の東側に多く見られる。

頂部の西側には一石宝篋印塔1基（10）、無縫塔1基（11）、地蔵5基（12～16）がまとまっており、中央には一石宝篋印塔1基（9）、東側には円頂六角柱墓標2基（17・19）、組合せ宝篋印塔の基礎1点（18）が分布している。

中段平坦面には、円頂六角柱墓標1基（2）や墓石の基壇（3～7）、台座、地蔵（8）などが中央から北寄りに分布している。

下段平坦面には、無縫塔1基（21）、組合せ宝篋印塔の基礎1点（22）、三界萬靈塔の基礎

（24）、地蔵3基（23・25・26）が確認された。

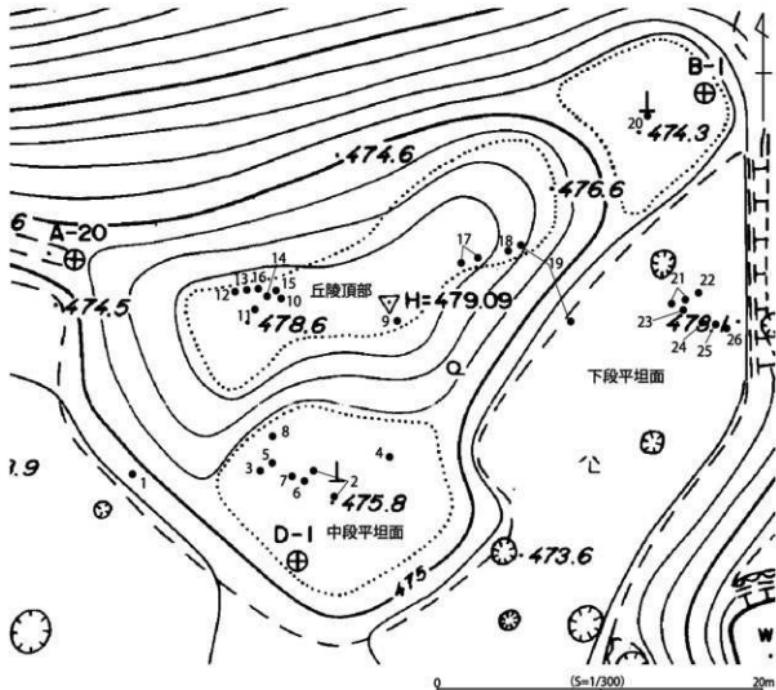
このほか丘陵頂部から北東に向かって走る平坦面に組合せ宝篋印塔の笠（20）、丘陵西側の斜面裾付近で一石五輪塔（1）が存在する。

これらのうち、西側斜面裾にある1と、中段平坦面にある2～7については既に報告されている（島根県教育委員会・大田市教育委員会2011）が、墓IVの全容を示すため再度掲載している。

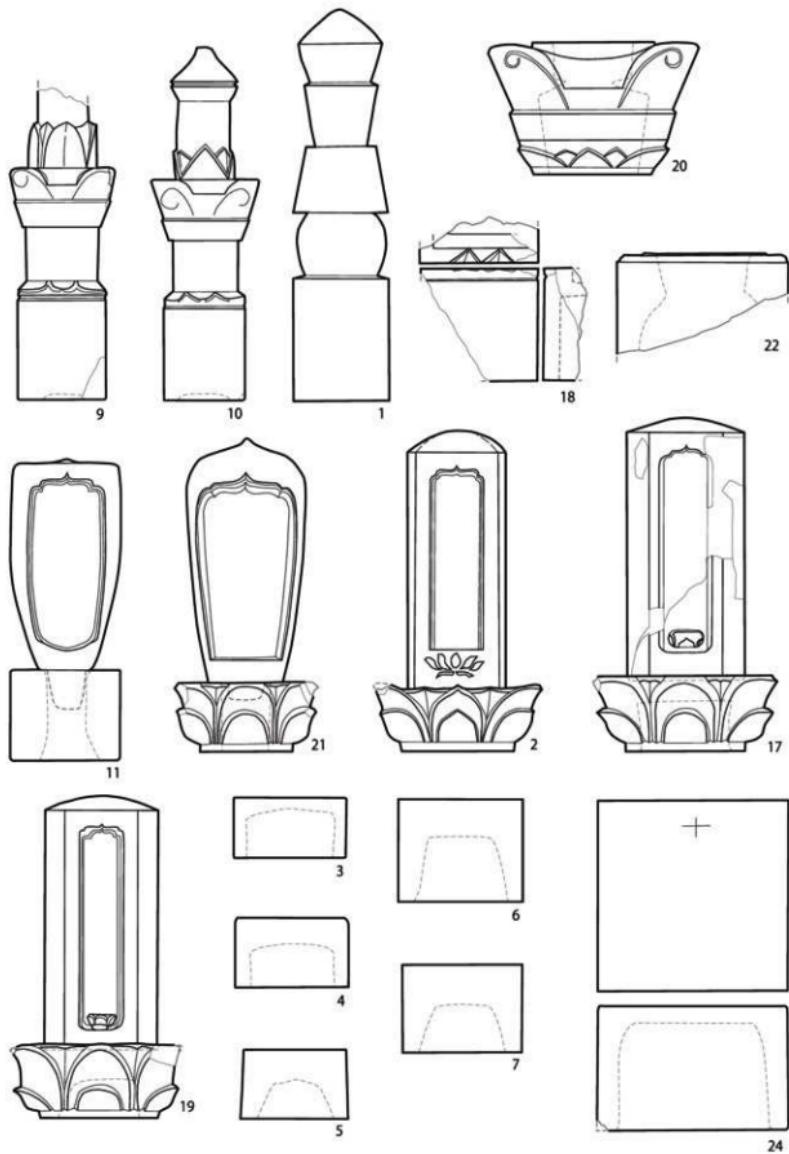
2. 石造物の様相（第12・13図）

一石宝篋印塔は2基確認されており、いずれにも塔身に「為」の字が彫り込まれている。9は「正徳元年卯」（1711）、10は「正徳四〇午」（1714）の紀年銘がある。

一石五輪塔は丘陵西側の斜面裾付近で1基（1）存在し、「慶長八年」（1603）の紀年銘を持つ。



第11図 石銀地区墓IV 石造物分布図



第12図 石銀地区墓IV 石造物実測図(1)

組合せ宝篋印塔は笠1点(20)、基礎2点(18・22)が確認されており、少なくとも2基以上が存在したと考えられる。22は誓号の戒名が刻まれている。

無縫塔は2基確認された。11は頭部が平坦で、頂部が若干突出するもので、方形の基礎と組み合わさっている。「宝曆十一辛巳」(1761)の紀年銘を持つ。21は頭部が丸みを持ち、請花のある台座と組み合わさるもので、戒名などが彫られた枠取り内部の上には梵字の「ア」が刻まれている。「享保□□辰天」「十二月二十四日」の日付が記されており、享保9年(甲辰、1724年)のものと考えられる。

円頂六角柱墓標は3基確認できた。いずれも塔身中央が割り込みによって枠取りされたもので、請花のある台座と組み合わさる。2は「宝曆十二」(1762)、17は「宝曆十一」(1761)、19は「宝曆六」(1756)の紀年銘が見られ、これらは近い年代で造立されたことが分かる。

3~7は中段平坦面で確認された墓石の基壇である。いずれも「童子」もしくは「童女」の戒名が刻まれ、安永5(1776)年から天明元(1781)

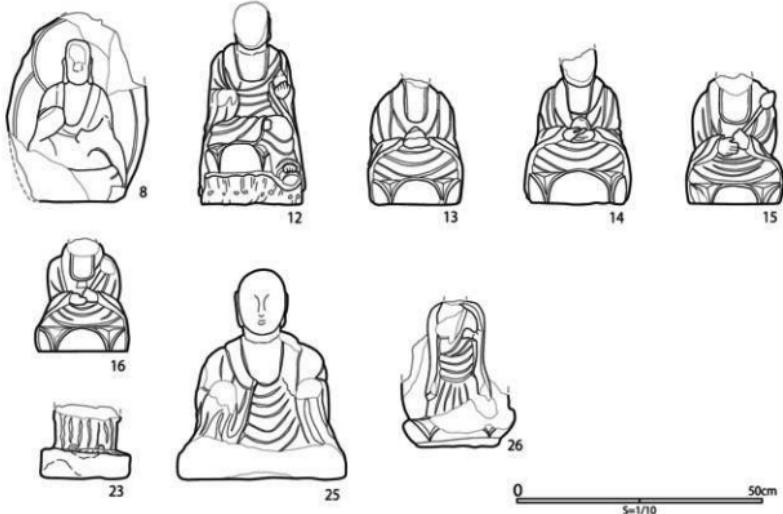
年の紀年銘がある。これらとどの墓石と組み合っていたのか不明であるが、中段平坦面にある地蔵(8)や、丘陵頂部にある地蔵(12~16)がその候補に挙げられよう。

24は下段平坦面東側で確認された墓石の基礎である。正面には「三界萬靈等」の銘が、右面に3人、左面に4人の子供の戒名、背面に「寛保元辛酉」(1741)の紀年銘や施主の名前が刻まれている。上面には墓石の合せ目印として、十字の線が彫られている。どの墓石がこの上に乗っていたのか明らかでないが、この付近にあるものでは25の地蔵が丁度おさまる大きさであり、その可能性が考えられる。

地蔵は9基確認された。両足を組んだ坐像(8・13~16・25)、半跏の坐像(12)、立像(23・26)が見られる。13・14は、背面に子どもの戒名や、明和8(1771)年の紀年銘が刻まれている。

3. 墓地の性格と年代

もっとも古い墓石は、慶長8(1603)年の一石五輪塔(8)であるが、単発的なもので、継続的に墓が造られるのは1710年代以降である。1760年



第13図 石銀地区墓IV 石造物実測図(2)

代から1780年代初めにかけて活発に造墓が行われるが、以後は新たな墓は造られていない。

この墓地では、真言宗の墓に見られる梵字「ア」が刻まれた無縫塔（21）や、淨土真宗に特徴的な「积〇〇」の法名を持つもの（3・13）もあるが、特定宗派への偏りは見出しがたい。ここで特徴的のは、子どもの墓（地蔵）が多いことで、戒名では大人9人に対し、子どもが14人も確認できる。

なお、この地点の字名は「薬師ノ段」、「薬師跡」で、寺院が存在したことを見かがわせている。

【参考文献】

- 1 島根県教育委員会・大田市教育委員会2011『石見銀山遺跡石造物調査報告書11—極楽寺墓地・温泉津沖泊道周辺の石造物・石銀地区』

第6節 墓Vの調査

1. 石造物の分布（第14図）

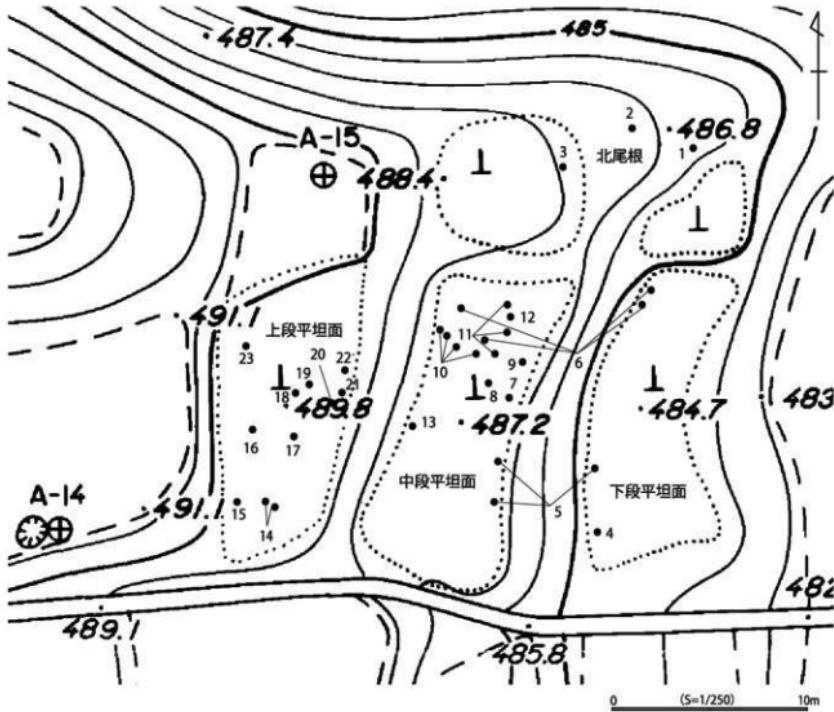
墓Vは石銀地区北西の低丘陵に位置する。北側には東西方向にのびる低い尾根（北尾根）があり、その南側に長さ15m、幅5～7mの平坦面が上下3段に連続している。石造物は北尾根上と、上・中・下段の平坦面に分布している。

北尾根上には一石宝篋印塔が3基存在する。

下段平坦面では、西側の斜面裾に位牌型墓標や、組合せ宝篋印塔、組合せ五輪塔の部材が見られるが、これらはいずれも中段平坦面から転落したものと考えられる。

中段平坦面には、一石宝篋印塔1基、一石五輪塔1基、組合せ宝篋印塔1基、組合せ五輪塔3基、円頂方形墓標1基、円頂方柱墓標2基がある。

上段平坦面では、一石五輪塔1基、円頂方形墓



第14図 石銀地区墓V 石造物分布図

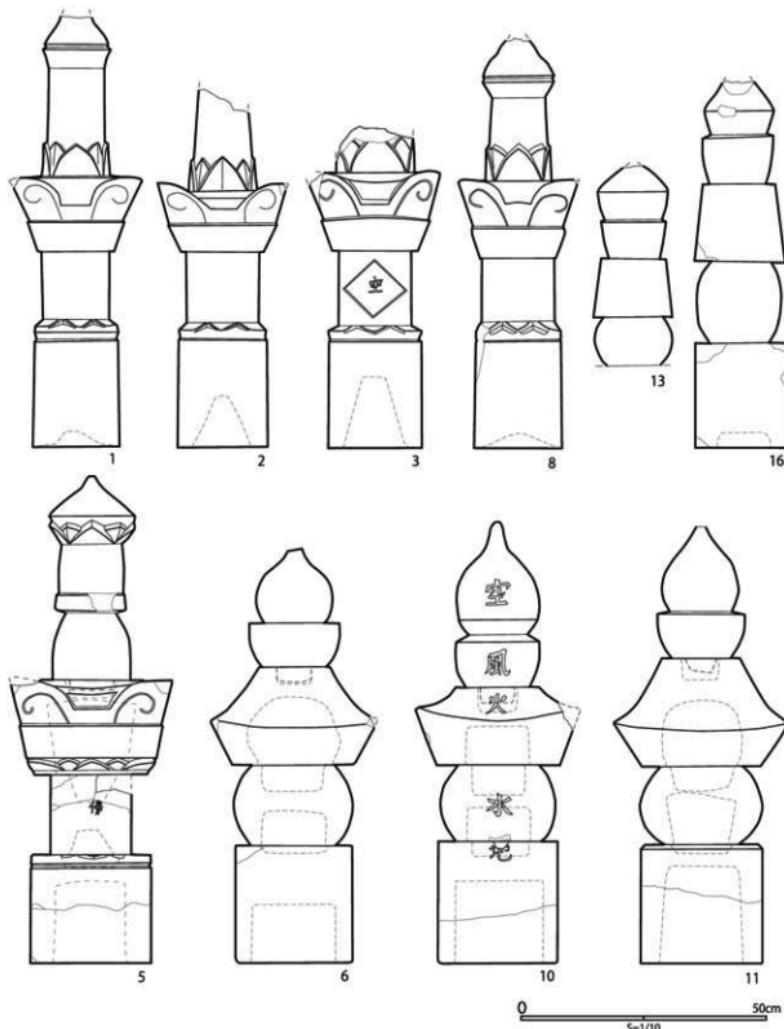
標7基、円頂六角柱墓標1基、地蔵1基が確認された。

2. 石造物の様相（第15・16図）

一石宝篋印塔は4基確認された。3は塔身に◇

の枠線が描かれ、その内側に「空」の文字が刻まれている。1は元禄7（1694）年、8は元禄12（1699）年の紀年銘を持つ。

一石五輪塔は2基確認された。13は水輪の幅が広く扁平であるのに対し、16は水輪の幅と高さが



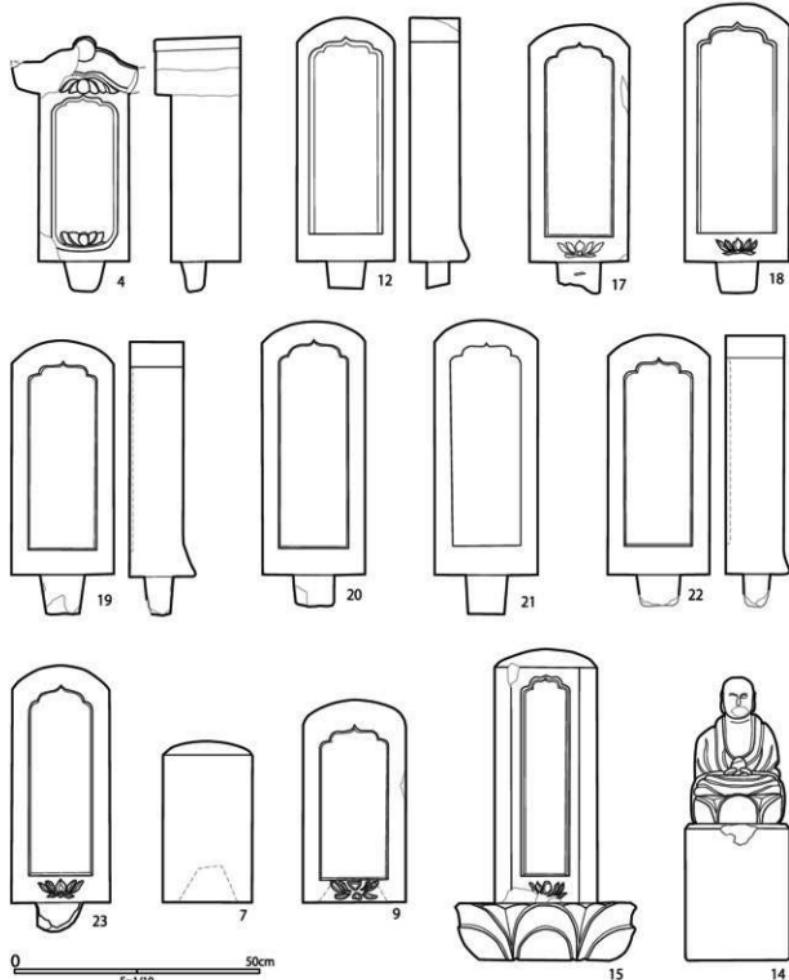
第15図 石銀地区墓V 石造物実測図(1)

ほぼ等しい。

組合せ宝篋印塔（5）は、中段平坦面に相輪、笠、塔身が、下段平坦面に基礎が散乱していたが、これらは同一の石塔部材と考えて図示した。復元高は約100cmになる。塔身には「佛」の文字が、基礎には戒名のほか「宝永」（1704～1711）

の紀年銘が刻まれていた。

組合せ五輪塔は3基分確認している。これらも倒壊しており、各部材が散乱していたが、位置関係などから組合せを復元した。10は空輪から地輪にかけて「空」「風」「火」「水」「地」が刻まれているため、この組み合わせに間違いないが、



第16図 石銀地区墓V 石造物実測図(2)

6・10については本来と異なる可能性もある。6は宝永5（1708）年、11は享保4（1719）年、10は寛保元（1741）年の紀年銘を持つ。

位牌型墓標は1基確認された。4は屋根が作り付けられたもので、棟は小円形に加工されており、軒下に花形の装飾が施されている。下端にはぼぞが作り出されている。塔身中央には削り込みによって枠取りし、下部には蓮弁文が浮き彫りされ、枠上部には梵字キリークが彫られている。正徳6（1716）年の紀年銘を持つ。

円頂方形墓標は8基確認されている。いずれも下端にはぼぞが作り出されており、塔身中央は削り込みによって枠取りされている。枠取りの下に蓮華文が彫り込まれたものもある（17・18・23）。12・19・22は下部が厚く作られている。紀年銘は、宝暦9（1759）年から安永9（1780）年のものまでが認められる。なお、20・21は夫婦の墓で、18・19・22は同一人物によって建てられたことが墓碑銘からわかる。

円頂方柱墓標は2基確認されている。7は高さの低い墓標で、頂部は4面とも丸みを持っている。「釈」の字が法名に用いられており、浄土真宗の墓と判断される。安永5（1776）の紀年銘を持つ。9は、頂部の正面・背面側は平坦で、側面のみ丸く加工されている。塔身中央は削り込みによって枠取りされ、枠内の上部にキリークが刻まれている。枠の下には蓮華文が彫り込まれている。元文3（1738）年の紀年銘を持つ。

円頂六角柱墓標は1基確認した。15は塔身中央が削り込みによって枠取りされ、その下に蓮華文が彫られている。請花状の台座を伴う。明和5（1768）年の紀年銘を持つ。

地蔵は1基確認した。14は蓮座の上に坐る像で、両出で宝珠を持っている。長方形の基壇には、「童女」の戒名や明和7（1770）年の紀年銘が刻まれている。

3. 墓地の性格と年代

戒名・梵字・墓石の型式等から宗派が特定でき

る墓は、浄土宗9基、日蓮宗1基、浄土真宗1基で、浄土宗のものが卓越している。このことから、浄土宗の寺院に付属する墓地であった可能性がある。そうであったとすれば、寺院の位置は下段平坦面からもう一段下（東側）の平坦面に存在したものと推測される。なお、この墓地では、3つの姓が確認されている。

墓石の紀年銘が最も古いものは、1の元禄7（1694）年、最も新しいものは18の安永9年（1780）年であることから、この墓地は17世紀末から18世紀後葉にかけて営まれたと考えられる。

墓地の形成過程については、

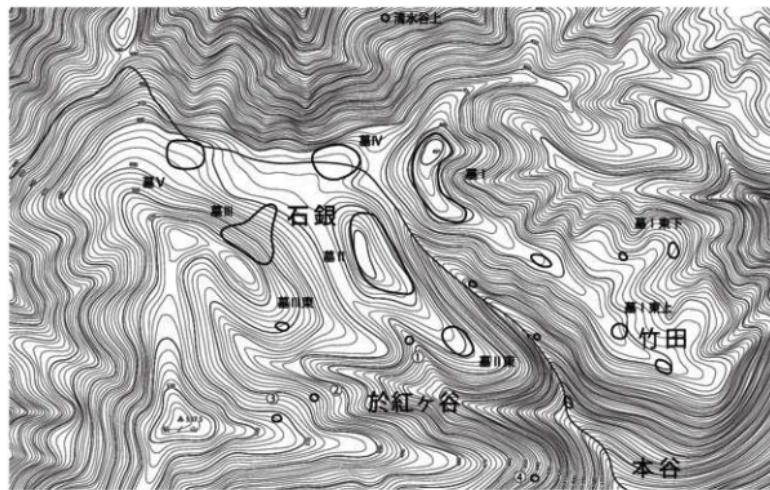
- ①1690年代に北尾根で一石宝篋印塔の造立、
 - ②17世紀末～18世紀初頭頃に中段平坦面で一石宝篋印塔や組合せ宝篋印塔の造立、
 - ③18世紀初頭～前半に中段平坦面で組合せ五輪塔のほか、位牌型や円頂方柱墓標の出現、
 - ④18世紀後半から上段平坦面を中心に円頂方形墓標などの造立、
- といった段階に区分することができる。

第7節 石銀地区のまとめ

石銀地区ではこれまでに墓II・墓IIIにおいて悉皆調査がされ（島根県教育委員会・大田市教育委員会2011・2012）、石銀地区から南西に下った本谷地区周辺でも、竹田地区（墓I東上・墓I東下）、本谷地区、於紅ヶ谷地区（①～④）の調査報告がなされている（島根県教育委員会・大田市教育委員会2010）。今回の調査により、仙ノ山周辺の主要な墓地について石造物の様相が明らかになった。ここでは、こうした成果を基に石銀・本谷地区周辺で墓地がどのように変遷しているのか見ていくことにしたい。

第1表は石銀地区及び本谷地区周辺における各墓地の年代と墓石の組成をまとめたものである。

最も多く墓石が認められたのは、墓IIIの54基で、次いで多いのが墓Vの23基、墓IVの19基である。なお、墓IVについては、表に挙げたものに加え、銘文を持つ基礎で石塔形式の特定できないも



第17図 石銀・本谷地区周辺の石造物群位置図

第1表 石銀・本谷地区周辺の石造物組成表

地区	紀年銘	基 数	一 石 宝 鏡	一 石 五 輪	組 合 宝 鏡	組 合 五 輪	無 縫 塔	位 牌 型	円 頂 方 形	円 頂 方 柱	光 背 形	地 藏
石銀Ⅰ	1615～1669	8	3	1	4							
石銀Ⅱ	1621～1714	4	1	1	2							
石銀Ⅱ東		3	2		1							
石銀Ⅲ	1597～1659	54	14	2	33		5					
石銀Ⅲ東	1688～1720	6	3							1	1	1
石銀Ⅳ	1603～1781	19	2	1	2		2				3	9
石銀Ⅴ	1694～1780	23	4	2	1	3		1	8	2	1	
竹田地区	1602～明暦	14	3	1	10							
本谷	1592～慶長	4	2	2								
於紅ヶ谷①		2		2								
於紅ヶ谷②	1678～1679	3	3									
於紅ヶ谷③	1594～1610	7		1	6							
於紅ヶ谷④	天正	1			1							
合計		148	37	13	60	3	7	1	8	3	4	11

のが5基確認されている。このほかの墓地は、10基未満の石塔が点在している。

各墓地において、一石宝篋印塔、一石五輪塔、組合せ宝篋印塔といった墓塔が見られ、一石宝篋印塔についてはほぼすべての墓地で認められる。

組合せ五輪塔は墓V、無縫塔は墓III、墓IVと限られた墓地のみに存在する。

墓標は、位牌型、円頂方形、円頂方柱、円頂六角柱、光背形の各種が確認されており、墓III東、墓IV、墓Vといった17世紀末から18世紀代の新しい墓地に見られる。地蔵も墓標と同様の傾向であるが、墓IVでは9基と卓越しており、この墓地の特殊性を示すものとして注目される。

次に各墓地の造墓年代についてみてみたい。

墓IIIや於紅ヶ谷地区、本谷地区で16世紀代にまで遡り、墓IIIについては17世紀中頃まで継続的な造墓活動が見られる。17世紀初頭から中頃にかけては墓I・墓II・墓IV、竹田地区でも墓が造られるが、点数は少なく、単発的なものと考えられる。17世紀後半には、於紅ヶ谷③で延宝6～7（1678～1679）年に3基の墓が造られる。

17世紀末頃から墓III東・墓IV・墓Vで墓地が営まれるようになる。墓III東は、少数の単発的な造墓と考えられるが、墓IV・墓Vでは継続的に墓石が建てられている。特に1760年代には墓IVで3基、墓Vで4基、1770年代にはそれぞれ5基ずつと造立のピークを迎える。ただし、墓IV・Vとも

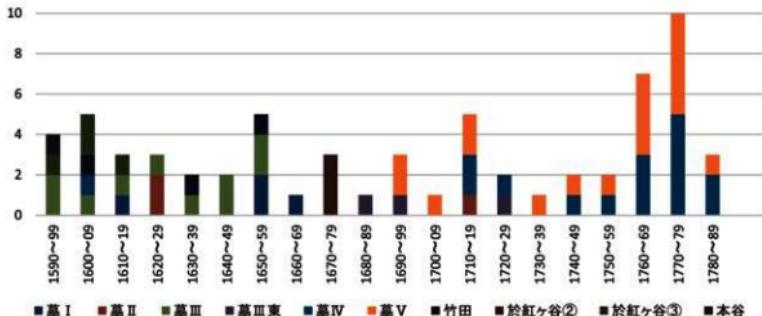
1780年代初頭を最後に新たな造基はされていない。

墓地の立地は、16世紀末～17世紀中頃までの古い墓地は丘陵尾根上や斜面に位置しているのにに対し、17世紀末～18世紀代の墓は広い平坦面に展開している。

石銀地区では発掘調査により16世紀後半から17世紀の採掘・選鉱・製錬造構が確認され、鉱山町が形成されたことが明らかにされている。また、石銀藤田地区では18世紀代の遺物も出土しており、この段階まで集落は存続していたと考えられる（守岡・新川2011）。墓の時期は、集落の存続期間とも対応しているようである。今後、造構・遺物と寺院・墓地のあり方を詳細に照らし合わせることにより、鉱山集落の具体像がより明らかにできると考える。

【参考文献】

- 1 島根県教育委員会・大田市教育委員会2010『石見銀山遺跡石造物調査報告書10—金剛院墓地・本谷地区周辺・中正路の石造物—』
- 2 島根県教育委員会・大田市教育委員会2011『石見銀山遺跡石造物調査報告書11—極楽寺墓地・温泉津沖泊道周辺の石造物・石銀地区—』
- 3 島根県教育委員会・大田市教育委員会2012『石見銀山遺跡石造物調査報告書12—仙ノ山石銀地区墓IIIの調査—』
- 4 守岡正司・新川隆2011「陶磁器からみた石見銀山遺跡」『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書1』



第18図 石銀・本谷地区周辺における石造物点数の変遷

第5章 栃畠谷地区字甚光院の調査

第1節 字甚光院と調査の概要

1. 字甚光院の概要

平成25~26年度に石造物悉皆調査を行った栃畠谷地区字甚光院は、石見銀山の銀山町では中核的な神社である「佐毘亮山神社」の北東150mほどの位置に所在する。当地は、仙ノ山から北西に派生する尾根の先端部に位置しており、標高は260~289mである。

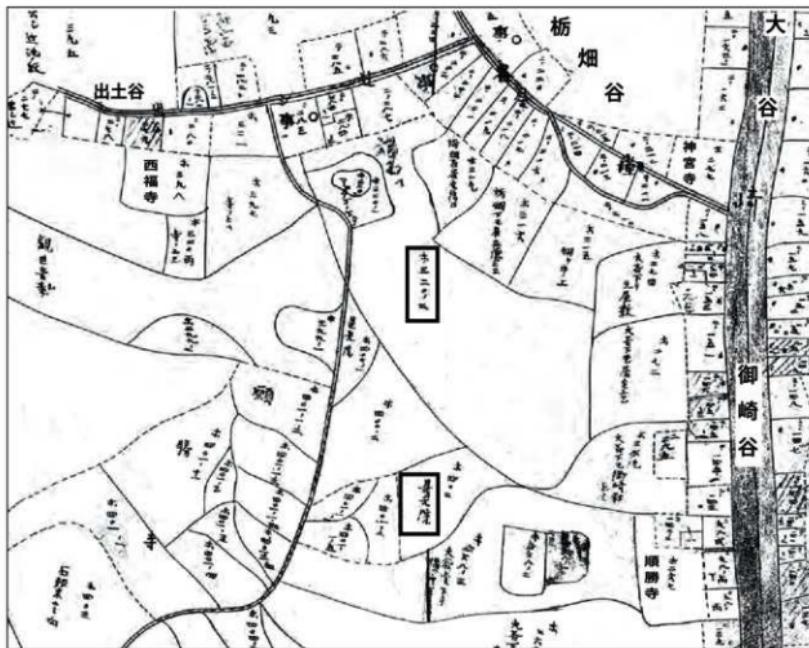
当地は南西側が昆布山谷・出土谷に、西側が栃畠谷に、北西~北東側が大谷・御崎谷に面しております。3方向に対して視界が開けるという眺望点でもある。

尾根頂部は、標高279~282mであり、東西23m×南北13mの不定型な平坦面となっている。当地周辺においては、標高266m以上の部分で岩盤や

浮石が露出し、奇観を呈している。丘陵頂部では、このような露岩をも取り込んで「愛宕社」の参道や燈籠基壇などが設けられており、山岳信仰の性格が強い「愛宕社」の境内空間として印象的なものとなっている。

愛宕社の参道は、字甚光院ホ400-2の南側平坦面北西隅から始まる。最下部は岩盤を削って石段を造り出している。露岩の間を縫うように参道を登り、丘陵の西側先端から北西側に回り込むよう登り、頂上の丘陵平坦面に達する。

丘陵頂部縁辺から東側の尾根続き及び尾根下方の斜面にかけては、16世紀末~17世紀前半に造立された宝篋印塔・五輪塔などが多数散乱している。南東側斜面では中腹に等高線に平行して幅が狭い平坦面が複数連なっており、斜面を雑壇状に



第19図 栃畠谷地区字甚光院付近の字切図（明治22年：一部加筆）

造成して墓地を形成していた様子がうかがわれる。丘陵南側の斜面には人工的に岩盤を掘削して石室状に造り出した岩窟が5か所あり、内部に石造物を安置していたことが確認された。石見銀山遺跡ではしばしば見られるものであるが、狭い地域に5基の岩窟があることは稀である。

丘陵南側には標高262m～265mのところで、東西32m、南北36mの台形状の平坦面が広がっている。ここでは17世紀後半以降の宝篋印塔、五輪塔も若干見られるが、18世紀以降の墓標が大部分を占めている。

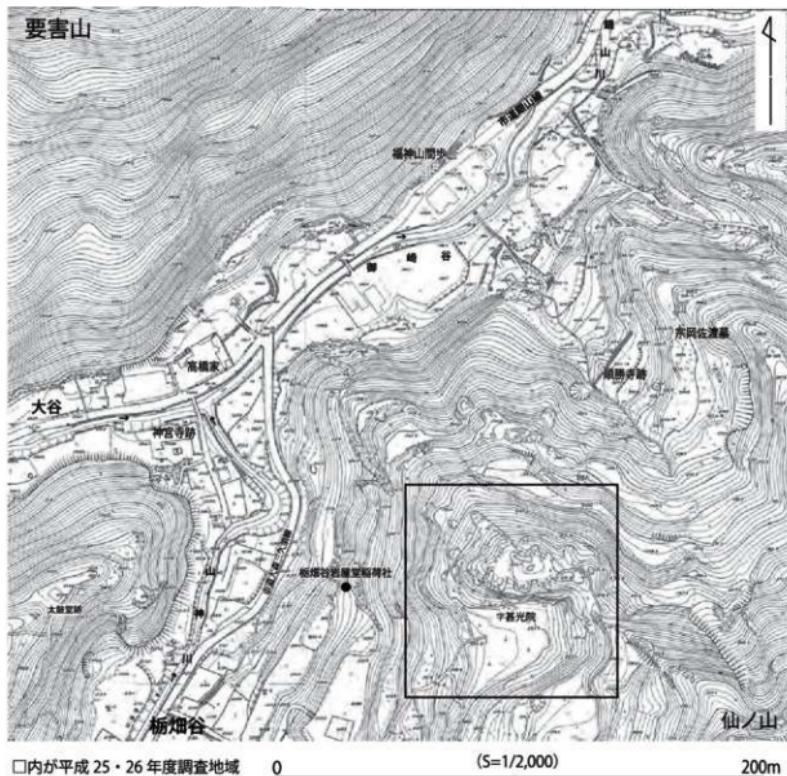
柄畠谷地区字甚光院は、その地名が示すように、かつて付近に寺院が置かれていたと想定され

るが、確かな伝承は少なく寺院の性格や存続期間は不明瞭である（三瓶古文書を読もう会1995）。なお、石造物に「誓号」の法名を持つものが多く確認できたことから、浄土宗の寺院が存在したことが想定される。

2. 既往の調査

石見銀山遺跡の大谷、昆布山谷、出土谷、柄畠谷地区の周辺では、字甚光院も含め、平成13年度に石造物分布調査が実施されている。

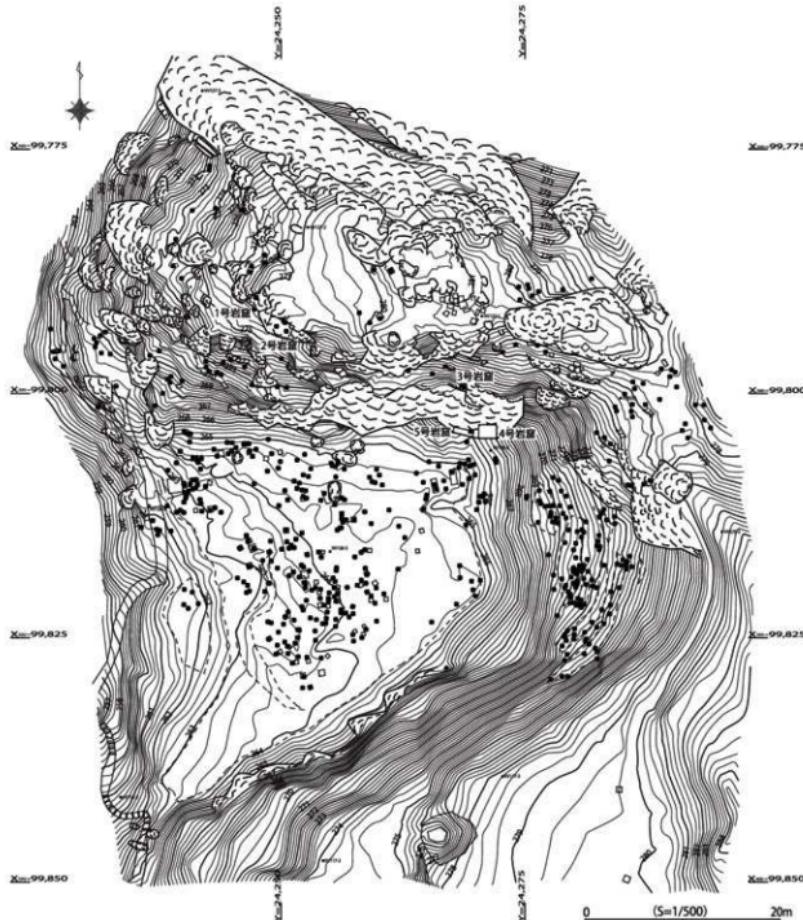
その成果は『石見銀山遺跡石造物調査報告書5』に掲載されており、字甚光院は「32群」として記載され、総数493基の石造物がカウントされた。



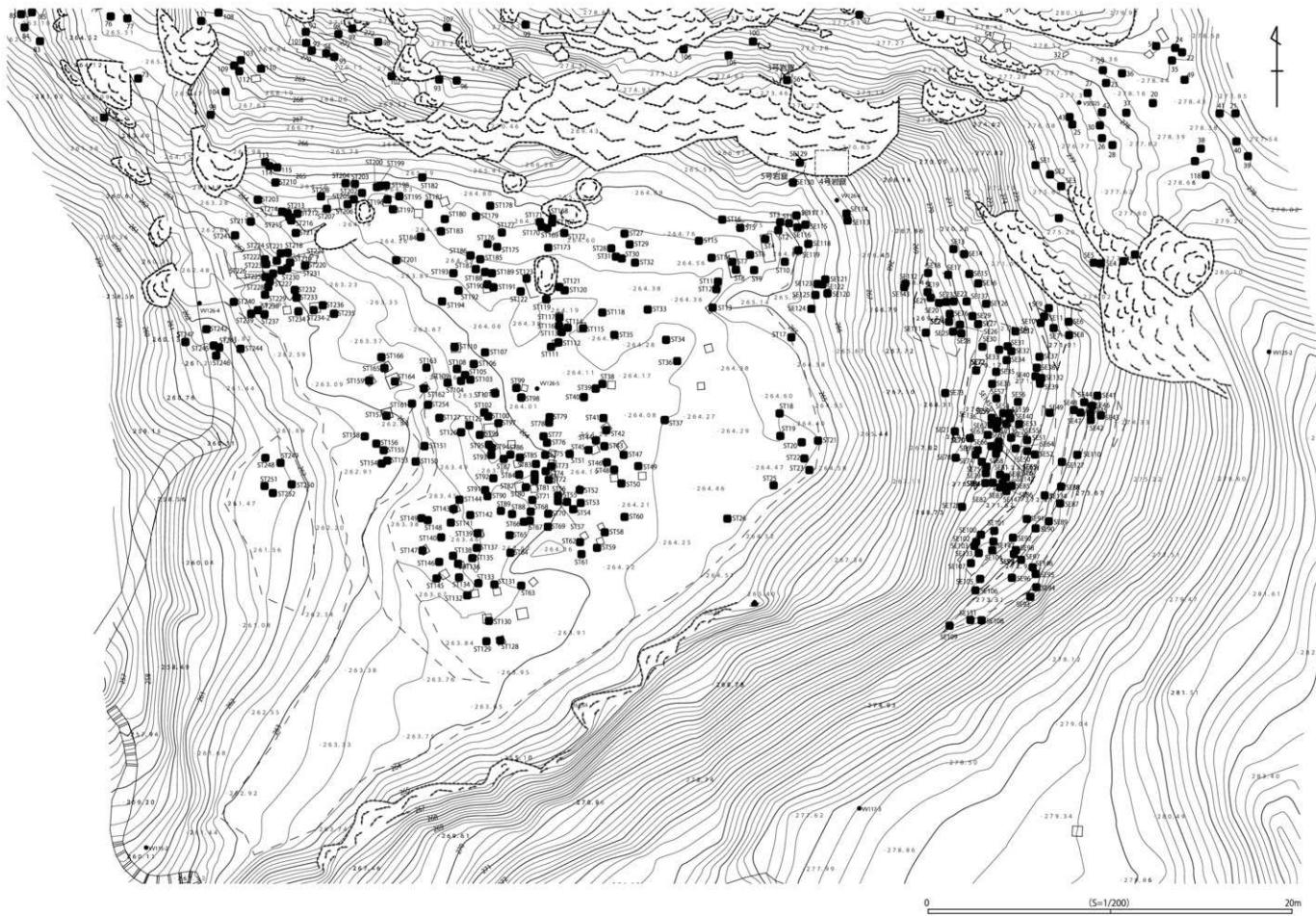
第20図 柄畠谷地区字甚光院周辺地形図

その内訳として、一石宝篋印塔140基、一石五輪塔110基、組合せ五輪塔3基、組合せ宝篋印塔25基、角塔200基、石仏3体の記載がある。永久鉱床側の銀生産域（大谷、柄畑谷、昆布山谷、出土谷）内では、妙本寺跡上墓地の488基を上回る最大数の墓群である。（島根県教育委員会・大田市教育委員会2005）。この分布調査の際には、「愛宕大権現」の燈籠も確認され調査票には記載されている。平成25年度には、市道柄畑谷三久須線の上部で治

山事業対象地となる尾根頂部及び東側尾根上、西・北側斜面、南側斜面、西側斜面下段において悉皆調査を行い一石宝篋印塔41基、二石宝篋印塔1基、一石五輪塔20基、組合せ宝篋印塔16基以上（台座7、基礎5、塔身1、笠14、相輪16）、地蔵2基、光背形墓標3基、燈籠2基、石殿3基、台座4基の計92基を確認している。この調査によって、丘陵頂部縁辺や斜面では16世紀末～17世紀前半代に墓域が営まれるが、17世紀後半以降は廃絶



第21図 柄畑谷地区宇甚光院全体地形図



第22図 栃畠谷地区字甚光院南東側斜面・南側平坦面石造物分布図

し、18世紀末頃には丘陵頂部の「愛宕社」が勧請されていたと考えられるようになった（島根県教育委員会・大田市教育委員会2014）。

3. 平成26年度の調査

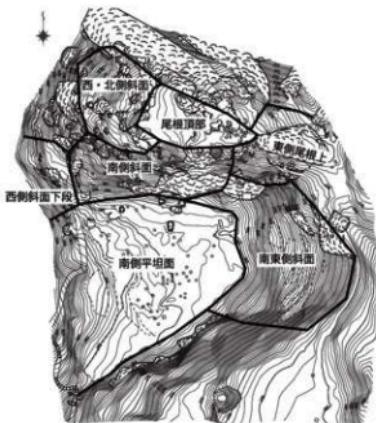
平成26年度には、字甚光院の全体像を把握するため、南東側斜面と南側平坦面の悉皆調査を実施することとした。調査期間は平成26年9月14日～16日で、島根県教育委員会・大田市教育委員会の職員のほか、立正大学文学部・池上悟教授及び立正大学院生2名も加わって石造物の記録を行った。9月16日には元島根県文化財保護審議会委員の田中義昭氏も招いて調査指導会を開いた。

確認された石造物は、南東側斜面のものは「SE」、南側斜面のものは「ST」と略称をつけ、それぞれ1番から番号をつけている。

今回の調査対象地には総数約400点という膨大な数の石塔が存在し、限られた調査期間で全ての石造物を実測するのは不可能であったため、全体の墓塔・墓標の分布と種別・点数を把握したうえで、17世紀代の墓塔が集中する南東側斜面の石造物を優先して実測し、南側平坦面については石造物の墓碑銘の記録と年代の特定できる古い墓塔を中心に実測を行うこととした。

南東側斜面では、一石宝篋印塔58基、一石五輪塔21基、組合せ宝篋印塔25基以上（相輪25、笠23、塔身4、基礎4、台座7）、組合せ五輪塔1基（空風輪1）、無縫塔4基、光背形墓標1基を確認しており、16世紀末から17世紀前半にかけて墓域が形成されていたことが分かった。

一方、南側平坦面では、一石宝篋印塔27基、一石五輪塔18基、組合せ宝篋印塔7基以上（相輪7、笠6、塔身3、基礎2）、組合せ五輪塔2基（火輪2、水輪2、地輪2）、無縫塔8基、円頂方形墓標72基、円頂方柱墓標68基、突頂方柱墓標1基、平頂方柱墓標2基、頂部形態が不明の方形墓標3基、光背形墓標1基、地蔵23基、石塔の基礎・基壇6基、花立2基、石龕1基を確認しており、17世紀後半から造墓が開始し、18世紀後半か



第23図 栃畠谷地区字甚光院区割図

ら19世紀前半にピークを迎え、20世紀半ばまで続いていることが分かった。

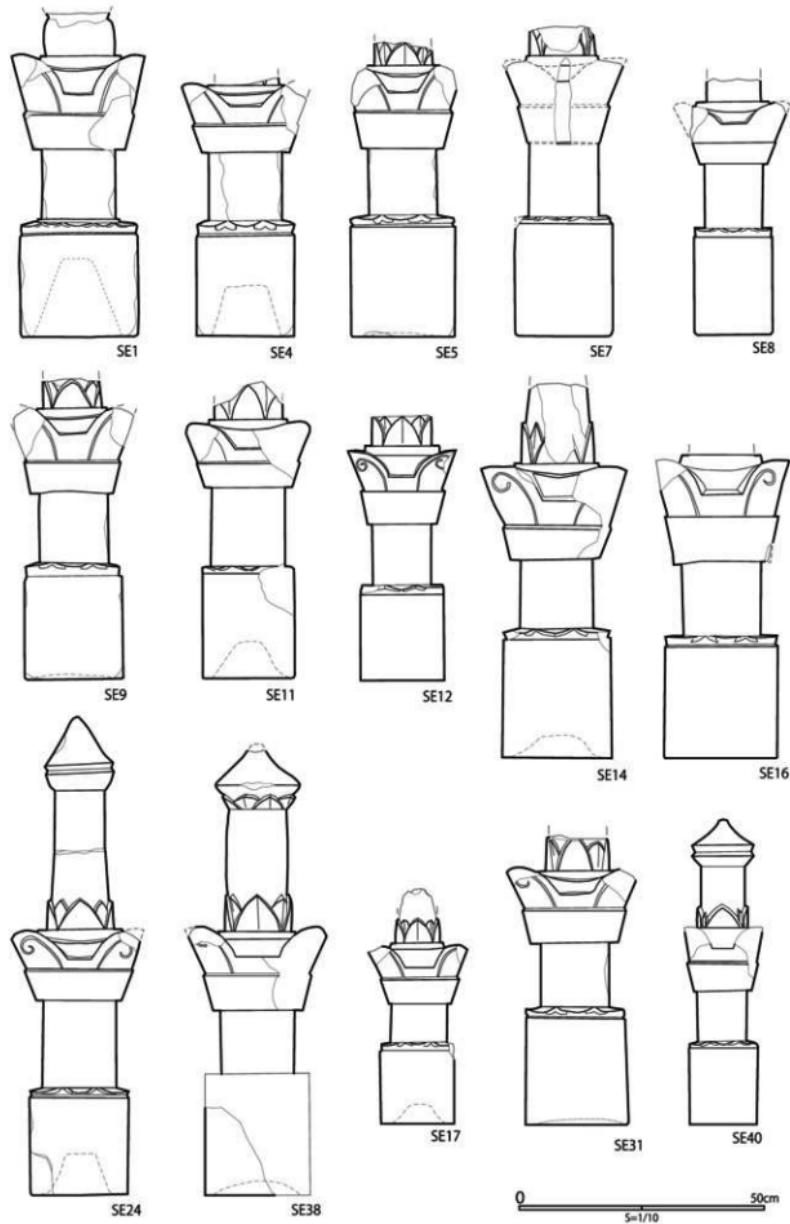
【参考文献】

- 1 三瓶古文書を読もう会1995『石見銀山百か寺』
- 2 島根県教育委員会・大田市教育委員会2005『石見銀山道路石造物調査報告書5—分布調査と墓石調査の成果—』
- 3 島根県教育委員会・大田市教育委員会2014『石見銀山道路石造物調査報告書14—栃畠谷地区字甚光院の石造物調査—』

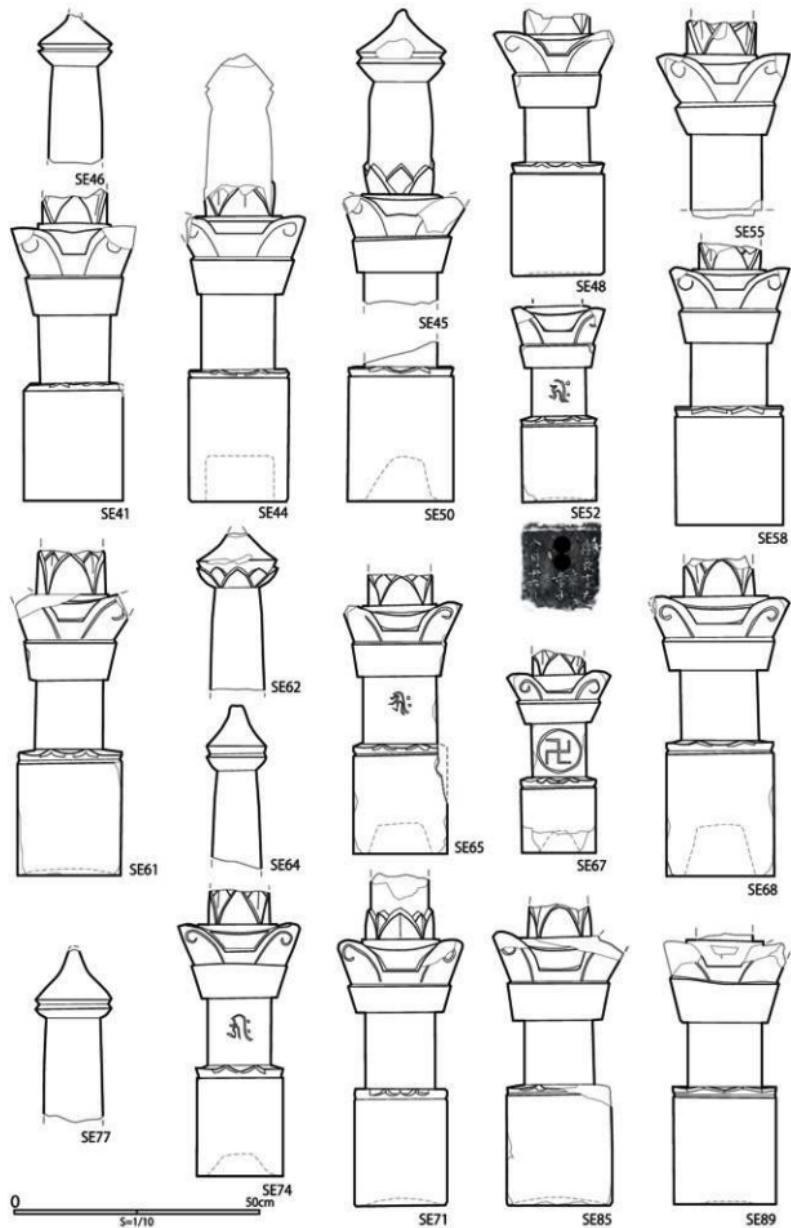
第2節 南東側斜面の調査

1. 墓地と石造物の配置（第22図）

南東側斜面は、丘陵頂部の南東側にある西向きの斜面で、斜面中腹の標高269m～274mの範囲で傾斜が緩やかになっている。流土の影響により不明確ではあるが、この範囲には等高線に平行して幅の狭い4、5段の平坦面が認められ、部分的に段を形成する石列らしきものも見られる。石造物は、この斜面中腹に集中しており、雛壇状に平坦面を造成した墓地に据え置かれていたと考えられる。ただし、ほとんどの石造物は転落・倒壊しているため、本来どの位置に存在したのか、どの石



第24図 柿畠谷地区宇甚光院 南東側斜面 石造物実測図(1)



第25図 栃畠谷地区宇甚光院 南東側斜面 石造物実測図(2)

材が組み合わさって一つの塔を形成していたのか、復元することは困難である。また、石造物の一部には、斜面裾付近や南側平坦面にまで転落したものもある。

斜面中腹の平坦面の北東に露出している岩盤には、複数の工具痕が顕著に見られ、岩山を削り出して墓地を造成していたさまが窺われる。

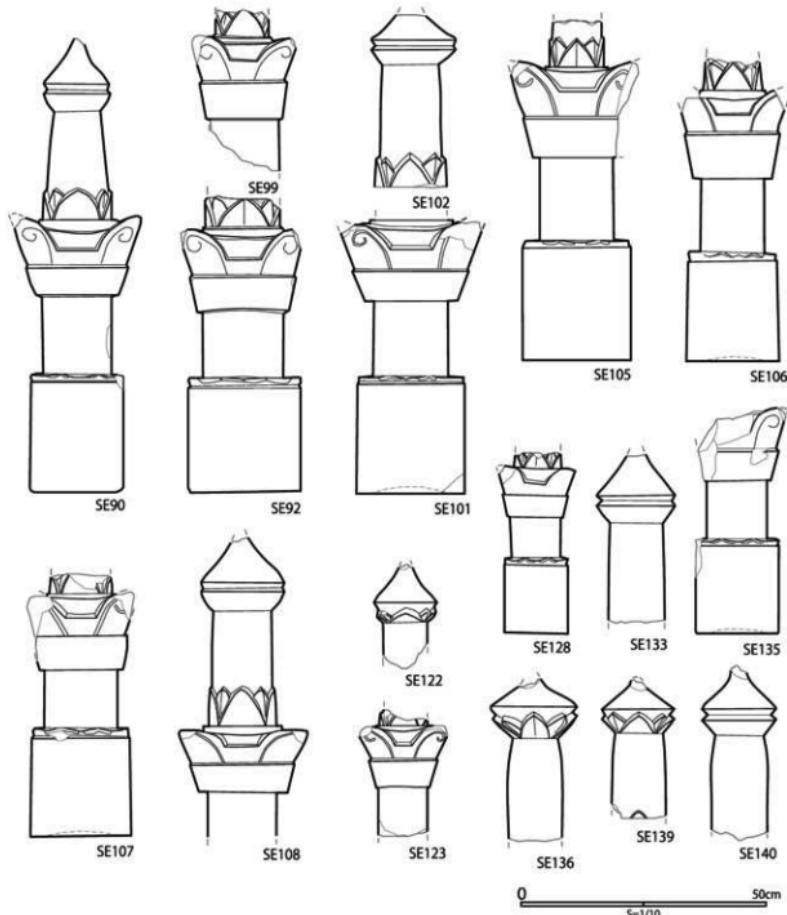
南東側斜面の北西裾付近にある岩盤には、2か所に岩窟が穿たれている。2か所ともかなり埋没

していたため実測はしていないが、4号岩窟は幅1.5m、高さ0.4m以上、奥行き1.2mで、5号岩窟は幅2.2m、高さ1.2m以上、奥行き0.55mのものであった。5号岩窟内には一石宝篋印塔1基(SE129)を確認している。

2. 石造物の様相

一石宝篋印塔（第24～26図）

58基を確認した。相輪の付け根もしくは途中で



第26図 柿畠谷地区宇喜光院 南東側斜面 石造物実測図(3)

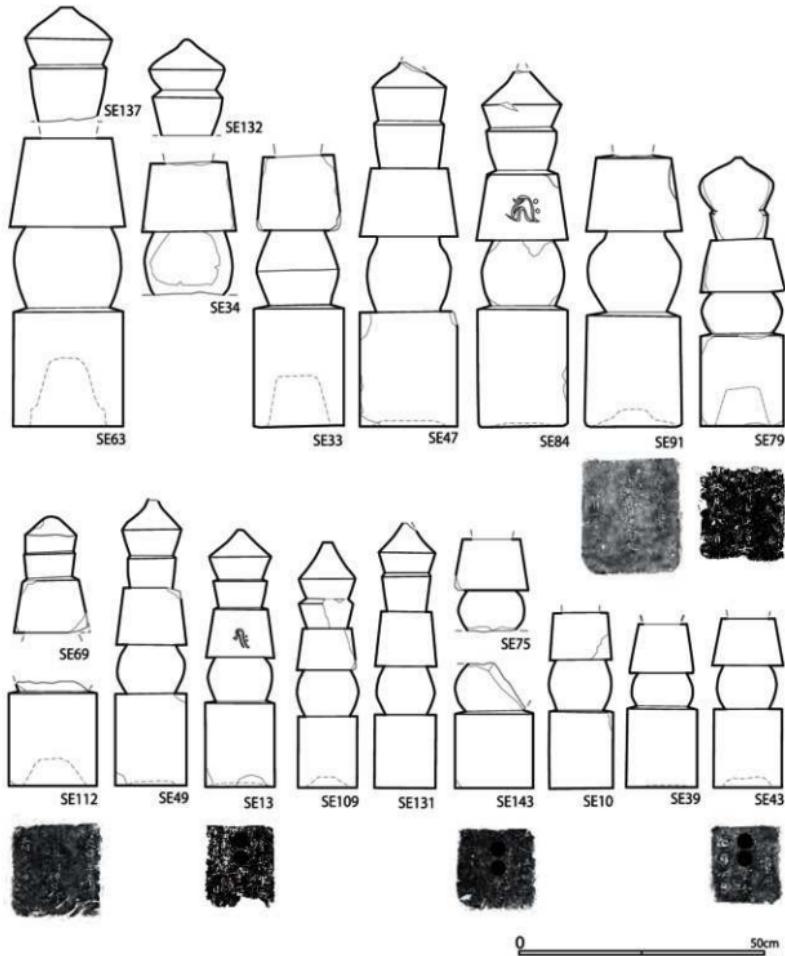
折れているものが多く、基礎から相輪の宝珠まで残存していたのは、SE24・38・40・44・90のみで、相輪のみ残存のものは10点であった。最も大きいものは高さ100cm前後、最も小さいものは60cm前後になると考えられる。およそその傾向として、基礎の高さが20cm以上のものとのそれ以下のものに分類できる。

SE1は相輪に伏鉢を持ち、基礎上面には一辺に

つき5枚の主弁と4枚の間弁からなる反花座がある。このほかの資料については、相輪に伏鉢がなく、基礎の反花座は一辺に3枚の主弁と2枚の間弁が配されたものとなっている。

相輪宝珠の形態は、下半に請花を持つものと、請花を持たず、中央に溝を入れて上下を分けているものがある。

塔身には梵字キリークを刻むもの（SE52・



第27図 栃畠谷地区宇甚光院 南東側斜面 石造物実測図(4)

65・74) や、月輪を線刻し、その内側に卍を入れたもの (SE67) も存在する。

紀年銘のあるものは10基で、慶長8(1603)年、慶長11(1606)年、慶長12(1607)年、慶長13(1608)年2基、慶長18(1613)年2基、寛永2(1625)年2基、正保3(1646)年の銘が確認された。このほかに正保年間だが年が判別できなかったものが2点存在する。

「沙門〇〇」の戒名を持つものが2基あることから、僧侶の墓にも用いられた可能性がある。また、「童子」・「童女」の戒名を持つ子どもの墓は3基確認されており、いずれも小型のものが用いられている。

一石五輪塔（第27図）

21基を確認した。規模から、総高75cm以上、地輪の高さ23cm以上の大型、総高55cm前後、地輪の高さ19cm前後の中型、総高50cm前後、地輪の高さ17cm前後の小型に大別できる。子どもの墓は5基確認されているが、いずれも小型の石塔である。

SE13・84のように火輪に梵字キリークを刻んだものも存在する。

紀年銘を持つものは10基で、文禄4(1595)年、文禄5(1596)年、慶長8(1603)年3基、慶長10(1605)年、慶長12(1607)年、慶長13(1608)年2基、元和3(1617)年の銘が認められ、このほかに慶長年号で何年か判別できなかったものが1基存在する。

組合せ宝篋印塔（第28~30図）

組合せ宝篋印塔は、いずれも倒壊し、部材が散乱しているため、本来の組み合わせを復元できないが、相輪25点、笠23点、塔身4点、基礎4点、台座7点を確認しており、25基以上が存在したと考えられる。なお、台座のSE18・19・25・54、台座と基礎が組み合わさって確認されたSE94についてはほぼ原位置をとどめているものと考えられる。

相輪は、伏鉢と九輪との間に巡る突帯の上に請

花を持つものと持たないものに大きく分類できる。大きさを見てみると、前者はいずれも高さ55cmを超え、SE22・70のように75cm以上のものも存在するのに対し、後者は大きいものでも高さ50cm前後で、最も小さいSE130は37.5cmである。なお、ほとんどの資料は宝珠下間に請花を持つが、SE130は宝珠下間に請花を持たず、宝珠の中央に溝を巡らせている。九輪・伏鉢に梵字「キャ」、「カ」が刻まれたものがあるが、いずれも65cmを上回る大型のものである。

笠は、軒下に請花を持つものと持たないものに分類できる。前者は高さ25cm以上のものが多く、中には30cm以上の大型品も存在するのに対し、後者は21cm前後のもののみである。大型品の中には梵字「ラ」が刻まれたものも存在する。

塔身は、最も大きいもので高さ23cm、小さいものは17cmである。SE36は梵字「キリーク」が、SE100・113には梵字「バ」が刻まれている。

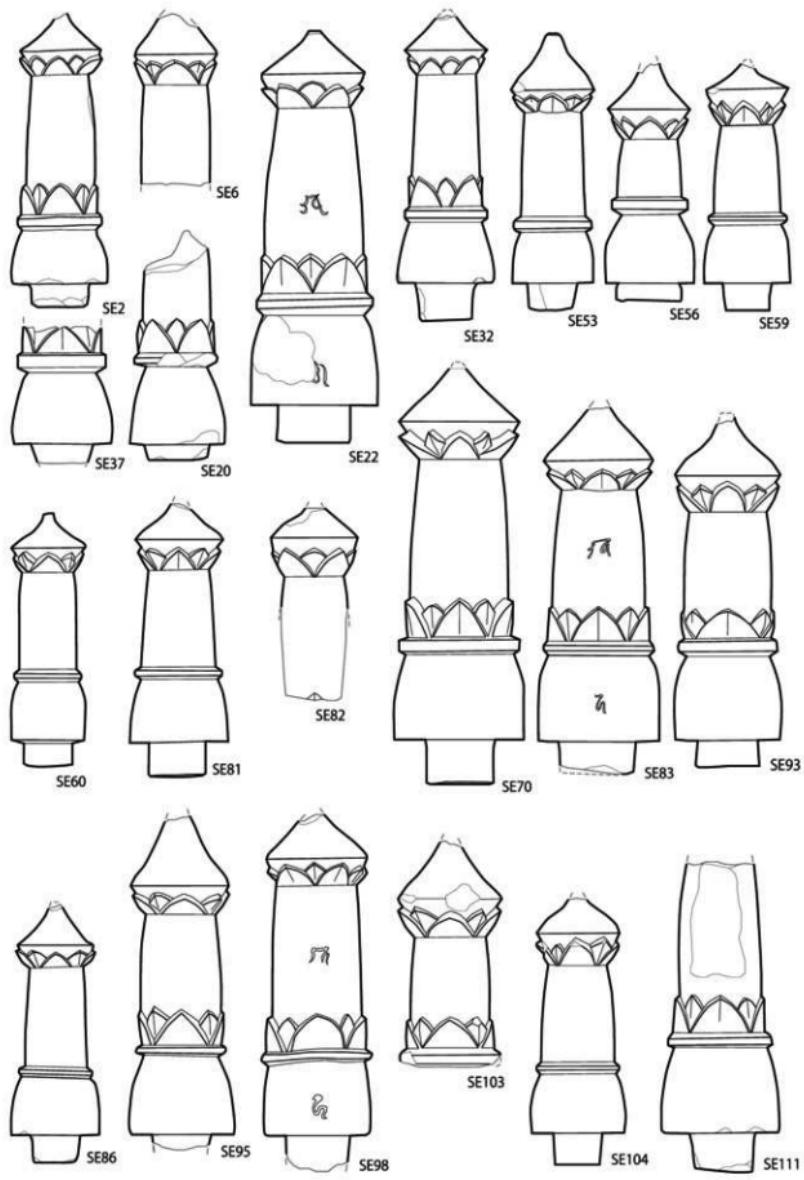
基礎は、上面の反花が蓮弁文によって構成されるもの (SE21・96・116) と鋸歯状に硬化した表現もの (SE145) が存在する。SE94は、台座を伴っており、元和7(1621)の紀年銘を持つ。SE116は正面に戒名が、左右側面と裏面に梵字「ア」が刻まれている。

台座はいずれも上面外周に蓮弁文による反花が巡り、中央に方形の基礎受部を持つものである。最大幅55cm前後、基礎受部が40cm程度の大型品と、最大幅48cm以下、基礎受部が35cm程度の小型品が存在する。SE3は隅に線香立ての円孔が穿たれている。

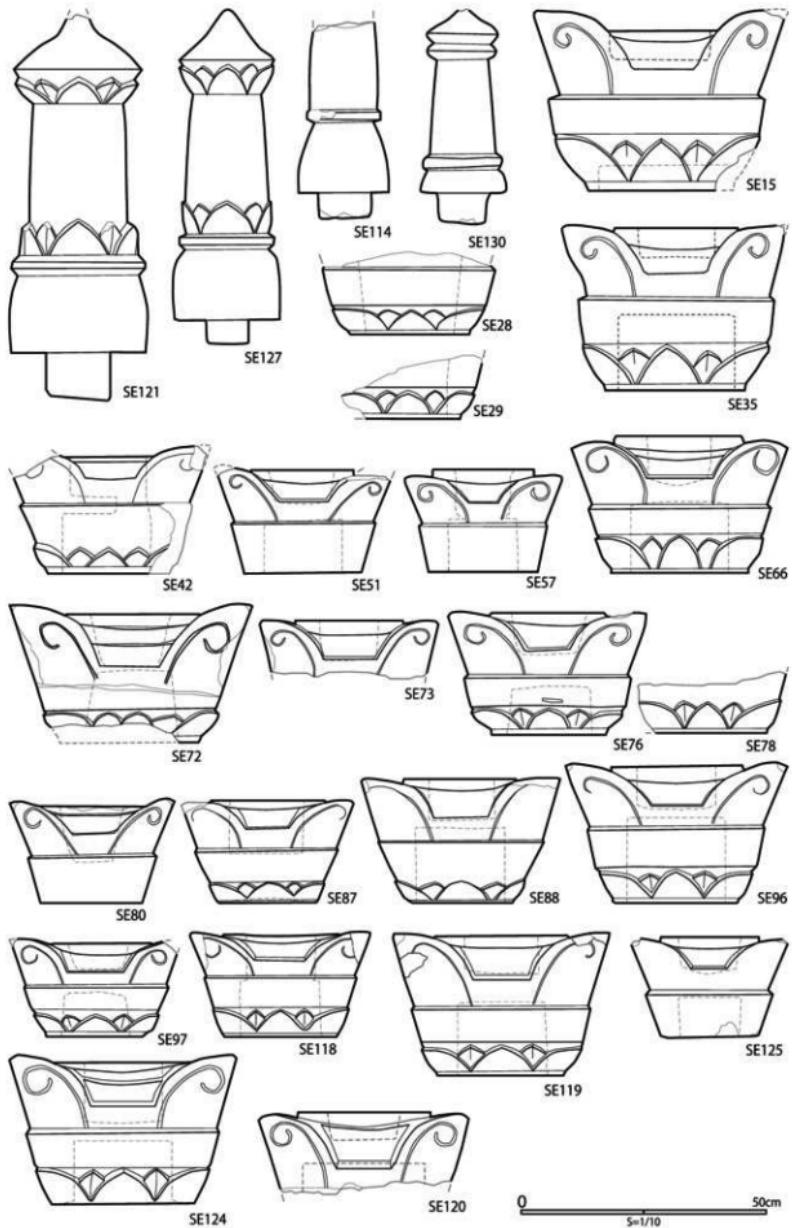
25年度の調査地点では、復元総高が150cmを超える大型の組合せ宝篋印塔が確認されているが、南東側斜面においても各部材に大型のものが見られ、同様の石塔が樹立していたと推測される。

組合せ五輪塔（第31図）

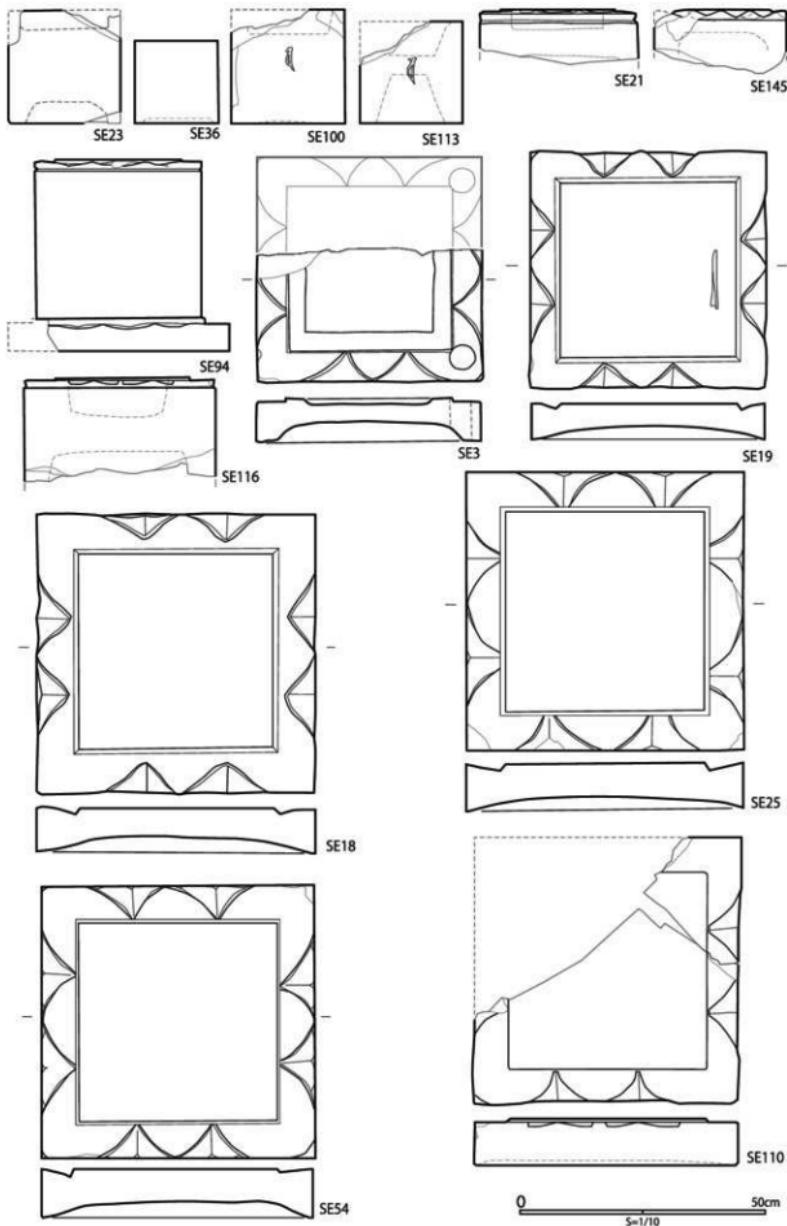
南東側斜面の北側裾付近で空風輪1点(SE115)のみを確認している。下端は、ほどを持たず、平坦に作られている。



第28図 柿畠谷地区宇甚光院 南東側斜面 石造物実測図(5)



第29図 栃畠谷地区宇甚院 南東側斜面 石造物実測図(6)



第30図 柿畠谷地区宇甚光院 南東側斜面 石造物実測図(7)

無縫塔（第31図）

確認された4基は、斜面中腹で北側の地点に集中している。

いずれも先端が尖り、塔身が裾細りになる円柱状のもので、頭部はあまり丸みを持たない。SE30は下端にはぞを持たず、割り込みが入れられたもので、他ははぞが作り出されている。

光背形墓標（第31図）

確認できたのはSE134の1基である。上部が欠損し、下部のみ残存している。正面中央を割り込んで周囲輪郭を浮き上がらせており、下部には間弁を伴う蓮弁文を彫り込んでいる。下端にははぞが作り出されている。

第3節 南側平坦面の調査

1. 墓地と石造物の配置（第22図）

南側平坦面は、平成25年度に悉皆調査を実施した丘陵の南側で、今回調査を実施した南東側斜面の西側に広がる東西32m、南北36mの台形状の平坦面である。標高は262~265mで、丘陵頂部とは26mの比高差がある。

墓塔としては一石宝篋印塔27基、一石五輪塔18基、組合せ宝篋印塔7基分以上（相輪7、笠6、塔身3、基礎2）、組合せ五輪塔2基（火輪2、水輪2、地輪2）、無縫塔8基を、墓標として円頂方形墓標72基、円頂方柱墓標68基、突頂方柱墓標1基、平頂方柱墓標2基、頂部形態が不明の方形墓標3基、光背形墓標1基を、そのほかに地蔵23基、石塔の基礎6基、花立2基、石龕1基を確認している。

石造物のまとめりは大きく見て、平坦面の中央から西側と、北東部、北側中央、北西部、南東部に存在する。

一石宝篋印塔、一石五輪塔、組合せ宝篋印塔などの墓塔は、北東部、北側中央、北西部及び南東部に分布しているが、北東部と南東部のものは南東側斜面の裾に集中しており、上方から転落したものと考えられる。一方、北側中央と北西部には

斜面裾から離れた部分にも存在することから、もとから南側平坦面に設置されたものもあったと推測される。

円頂方形・円頂方柱などの墓標は、北東部、北側中央、北西部、中央部から西側にかけて分布している。墓標には戒名・年号のほか、被葬者や造立者の姓名が記されているものもあり、近世の墓では16家の苗字を確認している。それらの中には、柄畠谷岩屋堂の稲荷社の願主となった三原親廣・親豊（岩橋2015）や、文久年間頃に龍源寺山山付であった手嶋佐太郎、永久稼所山付であった原田秋三郎らの家（島根県教育委員会2010）も含まれている。同姓の墓石は1か所にまとまって分布しており、家族ごとに墓域を形成していたことが分かる。

2. 石造物の様相（第32図）

南側平坦面では、石造物の分布・種別・墓碑銘は確認しているが、一部を除いて実測はしていない。そのため各種石造物の形態については論ずることはできないが、年代を中心に述べることしたい。

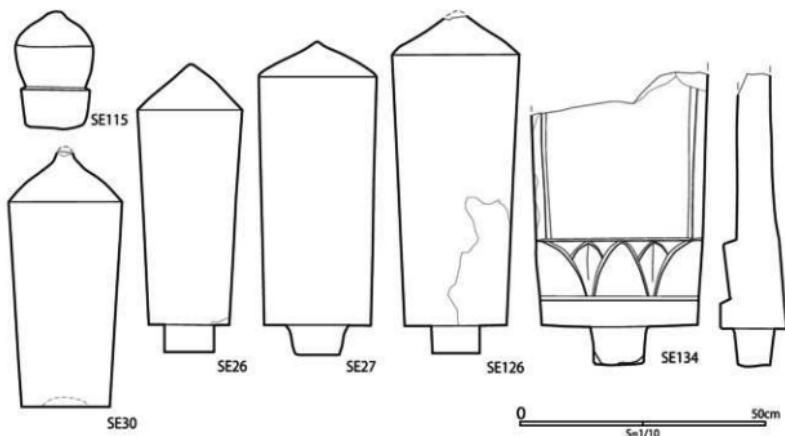
一石宝篋印塔

27基確認しているが、うち4基は南東側斜面から転落したものと思われ、そのほかは北側中央と北西部に分布している。

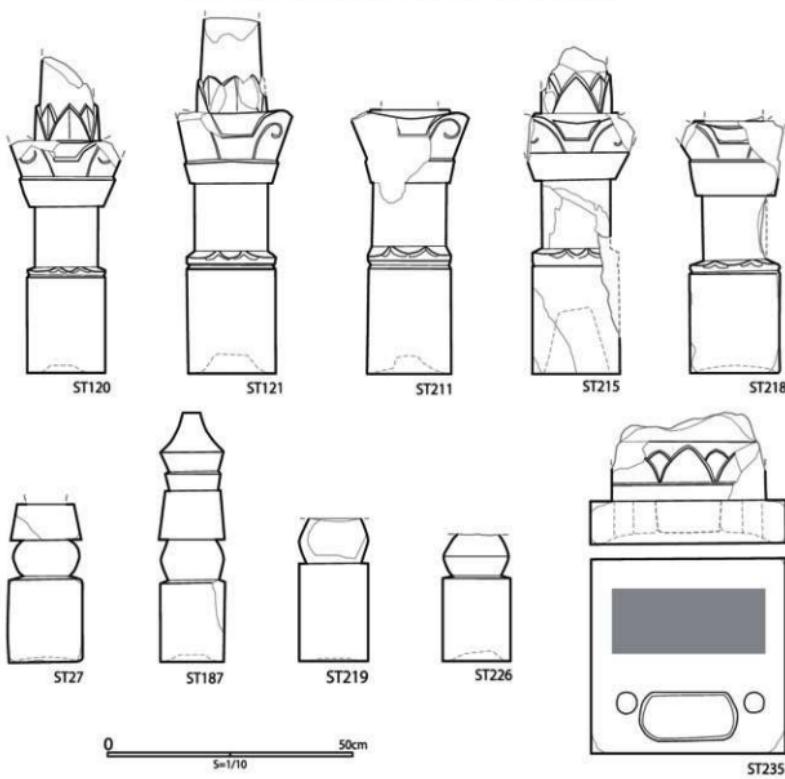
年号が確認できたものは4基で、ST215は寛文3（1663）年、ST120は延宝2（1674）年、ST211は元禄12（1699）年、ST121は宝永3（1706）年の銘を持つ。署号の戒名のものも存在する。

一石五輪塔

北側中央から北西部にかけて18基確認している。年号が解読できたのは4基で、ST226は元禄4（1691）年、ST187は「元禄十□」、ST27・226は享保9（1724）年の紀年銘を持つ。実測した4点はいずれも中型から小型のものである。ST27・187・219は子どもの墓であるが、ST226は院



第31図 栃畠谷地区字甚光院 南東側斜面 石造物実測図(8)



第32図 栃畠谷地区字甚光院 南側平坦面 石造物実測図

号をもつ大人の墓である。

組合せ宝蓋印塔

相輪7点、笠6点、塔身3点、基礎2点を確認している。このうち笠3点、相輪2点、塔身2点については南東側斜面から転落したものと考えられ、これらを除けば北西部に集中している。紀年銘が解読できたものはない。基礎のうち1点は號号の戒名を持つものである。

組合せ五輪塔

火輪2点、水輪2点、地輪2点を確認しており、北側中央の水輪1点を除けば、北西部に集中している。いずれも銘は確認できなかった。

無縫塔

北東部で2基、北側中央で1基、北西部で5基確認している。北東部の1基については南東側斜面から転落した可能性がある。

ST234の基礎は、天保6（1835）年の紀年銘を持ち、「法蓮社譽觀龍和尚」という戒名が刻まれていることから、浄土宗の僧侶の墓と考えられる。また、無縫塔の基礎の可能性があるST15には、「傳光山西福寺十七世 得覺代」という銘が刻まれており、西福寺に関連する僧侶の墓と考えられる。この基礎には「明□元甲申」の紀年銘も彫られており、干支と年号の組み合わせから、明和元（1764）年のものと考えられる。

円頂方形墓標

北東部、北側中央、北西部、中央部及び西側で確認している。最も古いものは享保14（1729）年、最も新しいものは大正12（1923）年の紀年銘を持つ。18世紀後葉から増加し、1830年代にピークに達する。浄土宗の墓に見られる號号の戒名や梵字キリーグが彫られたものが多いが、浄土真宗に特徴的な「釈」の法名を持つものも一定量存在する。日蓮宗に特徴的な「妙法」の頭書を持つものも1基確認できた。

円頂方柱墓標

中央部を中心に分布している。最も古いものは宝曆11（1761）年のもので、昭和33（1958）年まで造立される。號号の戒名のものが若干存在するが、「釈」法名のものが圧倒的に多い。「釈」法名の墓石は1770年代から認められるようになり、このころから浄土真宗の信徒による墓地が形成され始めたと考えられる。

光背形墓標

北西部で1基確認している。ST235は、正面中央が割り込まれて、周囲を浮き上がらせており、正面下部は蓮弁文が彫られていた。水入れや線香立ての円孔を持つ台座と組み合わさっていることから、ほぼ原位置を保っていると考えられる。

その他の墓標

平頂方柱墓標は、延享3・4（1746・1747）年の紀年銘を持つものと明治25（1892）年のものが存在する。突頂方柱墓標は昭和期のものを1基確認している。

地蔵

23基確認した。基礎や光背に銘を持つものがある。戒名が確認できたものは12基で、ほとんどは子どもの墓だが、「信土」号のものが2基存在する。紀年銘で最も古いのは享保18（1733）年、最も新しいのは天保9（1838）年で、18世紀後半に作られたものが多い。なお、子どもの墓は、19世紀以降になると墓標が主体になる。

【参考文献】

- 1 岩橋孝典2015「石見銀山・柄畠谷岩屋堂に所在する稱荷社について」『世界遺産 石見銀山遺跡の調査研究5』島根県教育委員会・大田市教育委員会
- 2 島根県教育委員会2010『石見銀山歴史文献調査報告書V 石州銀山治所要集』

第4節 字甚光院の石造物調査のまとめ

今回の調査によって、柄畠谷地区字甚光院における石造物群全体の概要を把握することができた。字甚光院の石造物の組成を第2表に示している。また、第33図は紀年銘を持つ石造物をもとに形式・年代別の点数を表したものである。石造物の中には、紀年銘を持たない、あるいは判読できないものもある（特に近世前期の墓塔に多い）ため、絶対数ではないが、造墓状況のおおよその変遷を反映しているものと考える。

こうした調査成果をもとに字甚光院の墓地の変遷とその性格についてまとめることとしたい。

墓域の形成と発展

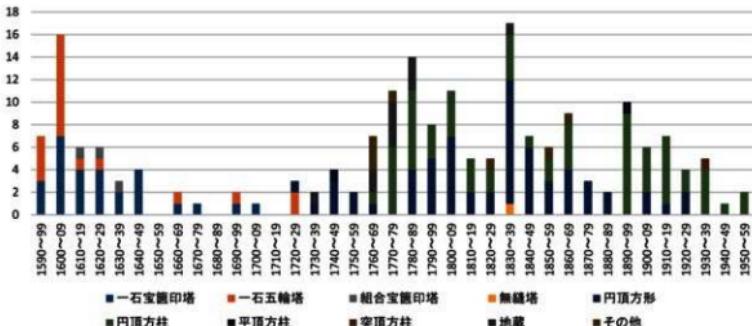
字甚光院では、16世紀末から丘陵尾根上及び斜面において造墓が開始され、17世紀初頭には石塔の造立数は最初のピークを迎える。こうした現象は、近世初頭における銀山開発と産銀量の増加、そしてそれに伴う人口増加や富の蓄積によって引き起こされたものと考えられる。

この時期の墓の特徴として挙げられるのは、銀生産域や生活域、さらに佐比毘山神社をも見下ろす位置に墓域が営まれていること、その中に大型の墓塔が造立されていることである。こうした点から、この墓地には有力な山師の墓が営まれ、それ自体が祭祀の対象として配置されたという想定

第2表 柄畠谷地区字甚光院の石造物組成表

地 区	紀年銘	基	一 石 宝	二 石 宝	一 石 五 輪	組 合 宝	組 合 五 輪	無 縫	円 頂 方	円 頂 方	突 頂 方	平 頂 方	方 形 ・頂 部不 明	光 背	地 形	そ の 他
		数	度	度	度	度	度	塔	形	柱	柱	柱	柱	形	藏	
25年度調査地点	1594 5 1663	92	41	1	20	16								3	2	灯籠2、石殿3、台座4
南東側斜面	1595 5 1646	110	58		21	25	1	4							1	
南側平坦面	1663 5 1958	241	27		18	7	2	8	72	68	1	2	3	1	23	石塔基礎6、花立2、石龕1
合 計		443	126	1	59	48	3	12	72	68	1	2	3	5	25	

*南側平坦面の点数は丘陵上部から転落した可能性のあるものも含む



第33図 柄畠谷地区字甚光院における石造物点数の変遷

もされている（島根県教育委員会・大田市教育委員会2014）。この時期の石塔には、戒名や紀年銘が刻まれるのみで、生前の名前や職などは分からぬいため確定することは言えないが、銀山最盛期にあたる時期に銀生産城に築かれていることから、銀山開発と関わりのある人物の墓であったことはいえるであろう。

なお、丘陵上の墓地は、岩盤の露出した尾根上や斜面を雑壇状に削り出して造成されており、岩

盤に穿たれた岩窟も5か所存在する。こうした地形において墓壙を掘削するのは困難であることから、丘陵上に展開する墓は供養のためのもので、埋葬地は別に存在した可能性も考えられる。

墓域の移動

丘陵での造墓活動は17世紀初頭がピークで、それ以後は減少傾向となり、17世紀後半には停止している。一方、南側平坦面では寛文3（1663）

第3表 字甚光院付近の土地利用の変遷概念

	丘陵頂部・尾根部・斜面	南側平坦面
16世紀	<p>1594年が初見（紀年銘）</p> <p>甚光院（浄土宗）の附屬墓地か？</p> <p>生産城・神社を俯瞰する大型墓塔</p>	
17世紀	<p>墓域の移動 埋葬方法の変化？</p> <p>17世紀後半から造墓</p>	
18世紀	<p>天明年間に松原常右衛門らによって石堆墓が寄贈される</p> <p>1789年頃製作の巻絵図に「アコ社」が描かれる</p>	<p>墓標の出現</p> <p>1784年、「傳光山西福寺」銘の石塔</p> <p>18世紀後葉、浄土真宗の墓の出現、浄土真宗の墓と共存</p>
19世紀	<p>愛宕権現社</p> <p>1868年神仏分離令</p>	<p>1835年、浄土宗僧侶の無縫塔</p>
20世紀		<p>浄土宗寺院の廃絶？</p>

年には造墓が始まっており、数は少ないながらも1720年代まで墓塔（宝篋印塔・五輪塔）が造立されている。後述するように南側平坦面は、18世紀以降の墓標が主体となる墓地であることから、一見すると両者の間には断絶があるよう見受けられる。しかし、今回の調査によって丘陵上の墓塔群と南側平坦面の墓標群とをつなぐ時期に南側平坦面で墓塔が確認できたことから、継続的な造墓活動の中で墓域が移動したと推測される。この背景には、丘陵上の墓地が飽和状態になったことのほか、「祭祀・供養のための墓地」から「埋葬を伴う墓地」へと変化したということも考えられる。

南側平坦面に墓域が移動してから墓標が出現するまで、すなわち17世紀後半から18世紀前半にかけては、それ以前と比べ造墓数は低調である。また、南側平坦面では丘陵上の墓地と比較して、一石宝篋印塔・五輪塔に対する組合せ宝篋印塔の割合が少くない。こうした様相は、これまでの石見銀山遺跡の石造物悉皆調査でも認められる傾向であり（島根県教育委員会・大田市教育委員会2005）、銀山の衰退・産銀量の低下に伴う銀山町での人口減少や経済力の低下を反映しているものと考えられる。

墓標の出現とその後の展開

1730年代になると墓塔に替わって墓標が造立されるようになる。これ以降は1780年代まで造墓数はほぼ順調に増加している。これまでの石見銀山遺跡の石造物悉皆調査では墓地によって多少の様相はことなるが、18世紀代は造墓数がおおむね順調に増加しており、字甚光院における造墓状況も似たような傾向を示している。この時期は、産銀量が低迷しているにもかかわらず、造墓数が増えているのは、從来よりも石塔を立てられる階層が拡大したことが背景にあると考えられる。また、字甚光院の南側平坦面で造墓活動のピークとなる1780年代に丘陵上で愛宕社の灯籠の寄進がされていることから、この頃にさまざまな宗教活動が活

発化するような背景があったということも想定されよう。

ただし、その後の造墓数は一定しておらず、1830年代と1890年代にピークを持ちながらも大きく増減をしている。こうした現象は、字甚光院墓地周辺の人口動態や檀家数の変動などによるものと推測される。

20世紀になるとほぼ減少傾向であり、1950年代で造墓は停止している。

墓地と寺院・宗派

「甚光院」という字名から付近に寺院が存在したと推測されるが、「甚光院」について具体的な記述をした文献史料は確認されていないため、実態は明らかでない。しかし、今回の石造物調査によってこの墓地と寺院や特定宗派との関連性を見出すことができたので以下にまとめておきたい。

丘陵上の墓域は、浄土宗の墓に特徴的な号の戒名や梵字キリークが刻まれた石塔が多く見られる。また、南東側斜面には無縫塔が存在することから、この墓地は当初から浄土宗寺院のもとで形成されたものと考えられる。南側平坦面に墓域が移動した後も、浄土宗寺院との関わりを示す資料がある。明和元（1764）年のものとみられる石塔基礎には、「傳光山西福寺十七世得昌代」の銘が確認された。「西福寺」は元禄期の古地図及び明治初年の切絵図には銀山柄畠谷に載っており、また、寛政元（1789）年の『私領御順見様御案内帳（写）』には佐摩村の内銀山町に「浄土宗西福寺」の記載がある（三瓶古文書を読もう会1995）。こうしたことから、「甚光院」は浄土宗「西福寺」の関連寺院ということが考えられる。ただし、「銀山百か寺」（三瓶古文書を読もう会1995）では「西福寺」の山号は「天龍山」と記されており、石造物の銘とは異なる。「西福寺」の山号が変わったのか、それとも「天龍山西福寺」とは別に「傳光山西福寺」が存在したのか今のところ明らかではない。

1770年代になると「釈」の法名を持つ浄土真宗

の墓が出現し、以後継続的に一定数の造墓がされるようになる。一方で、浄土宗の墓も造立されており、天保6（1835）年銘の浄土宗僧侶の無縫塔もあることから浄土宗寺院の関わりは継続していたとみられる。ただし、他宗派の墓と共に存していいる点で墓地の性格は大きく変化したとのと考えられる。20世紀になると浄土宗の墓の造立はほとんど見られなくなることから、この頃には浄土宗寺院も廃絶した可能性がある。

いかなる理由で浄土宗寺院の墓地から浄土真宗の墓地が営まれるようになったのか、浄土宗寺院

と浄土真宗信徒との関わりがどのようにであったかは定かではなく、これから検討課題であるが、寺院墓地の変遷や宗派間の関係を考える上で興味深い資料が得られた。

【参考文献】

- 1 烏根県教育委員会・大田市教育委員会2014『石見銀山遺跡石造物調査報告書14—柄畠谷地区字甚光院の石造物調査—』
- 2 烏根県教育委員会・大田市教育委員会2005『石見銀山遺跡石造物調査報告書5—分布調査と墓石調査の成果—』
- 3 三瓶古文書を読もう会1995『石見銀山百か寺』

			挿図番号
ST255	ST254	ST253	報告番号
一石五輪塔	円頂方形基標	円頂方形墓標	種別
			全高
			最大幅
(左邊) 俗名蓋平 龜大師立之	(正應) 天保二卯 五月十日卯 〇〇〇〇	(正應) 安永九子 二月十五日 〇〇〇〇	銘文
水輪以下欠損			備考
	1831	1780	西歷

凡例

- ・石見銀山遺跡の石銀地区及び柄畑谷地区字甚光院に存在する石造物を掲載した。
- ・各石造物の規模は基本的に全高及び最大幅、墓標の幅をセンチメートル単位で掲載した。欠損している場合は残存している高さ・幅、または各部材毎の高さ・幅を掲載した。
- ・銘文の欠損等は、文字の個数がわかる部分は□□、判読不明部分及び文字の存在が推定される部分は〔 〕で示し、銘文の上下が欠損して字数が不明な場合は（上欠）、〔（下欠）と示した。また推定できる文字は□のあとに（ ）と表示した。
- ・戒名及び名字は基本的に伏せ字で〇〇〇とした。
- ・掲載していない石造物についても実測台帳は保管し、今後の研究の資料とした。
- ・写真図版及び挿図の個別番号は一覧表の番号に対応する。

	32		32		32				32				32				32	
ST221	ST220	ST219	ST218	ST217	ST216	ST215	ST214	ST213	ST212	ST211	ST210	ST209	ST208	報告書号				
円頂方彫基標	地蔵	一石五輪塔	一石五輪塔 印塔	組合せ宝蓋印塔 (塔身)	一石五輪塔	一石五輪塔 印塔	無縫塔	無縫塔	無縫塔	一石五輪塔 印塔	一石五輪塔	一石五輪塔 印塔	組合せ宝蓋印塔 (基盤)	種別				
		(29.0)	(52.5)			(66.5)				(54.0)				全 高				
		14.5	(21.0)			(17.0)				24.0				最大幅				
		正月 十六日	正面 事務局 口口口口口	(正面) 「 □□■ □□(安力) □月廿口日	(正面) □□ □□(安力) □月廿口日	于寶實文三口 印 ○○○○○ 廿七日 捐 正月 元口(福力)十二年 十一月十二日								銘 文				
経文は削られている。		空塼輪及び大輪は欠損。	損 相輪及び豆の陳飾りが欠	各面に月輪が彫られ、その中に月輪が彫られ、モリーラー、タッカ、□が刻まれてある。金剛界五種子と見えられる。	相輪は講花よりも上が欠損、笠に充孔字つ、基礎にアガルが刻まれる。					相輪欠損				備 考				
		1724				1663				1699				西 曆				

							持回査号
ST139	ST138	ST137	ST136	ST135	ST134	ST133	報告査号
円頂方形基樁	円頂方柱基樁	円頂方柱基樁	円頂方柱基樁	円頂方形基樁	円頂方柱基樁	円頂方柱基樁	種別
							全高
							最大幅
(正面) 製〇〇 右側 明治廿一年 一月廿六日 年二十五才 シナ木	(正面) 製〇〇 右側 明治廿一年 八月廿六日 友太郎吉男 〇〇作 年十七才	(正面) 製〇〇 左側 文久五月一日ナカ 文久二八月三日清太良 左側 製〇〇(假女 昭和八年三月廿一日)行 年八十 建立〇〇義姫母	(正面) 製〇〇 右側 製〇〇(信士 天保四年四月廿一日 行年五十八才 原田松三郎立之)	(正面) 製〇〇 右側 製〇〇(信士 天保四年四月廿六日 行年五十八才 原田松三郎立之)	(正面) 製〇〇 左側 製〇〇(信士 天保四年四月廿六日 行年五十八才 原田松三郎立之)	(正面) 製〇〇 左側 製〇〇(信士 天保四年四月廿六日 行年五十八才 原田松三郎立之)	銘文
正面) 製〇〇 右側 製水印 九月廿六日 喜太郎立之	正面) 製〇〇 右側 製水印 九月廿六日 喜太郎立之	正面) 製〇〇 右側 製水印 九月廿六日 喜太郎立之	正面) 製〇〇 右側 製水印 九月廿六日 喜太郎立之	正面) 製〇〇 右側 製水印 九月廿六日 喜太郎立之	正面) 製〇〇 右側 製水印 九月廿六日 喜太郎立之	正面) 製〇〇 右側 製水印 九月廿六日 喜太郎立之	備考
1848	1896	1833	1931	1860	1897	1903	西曆

								持回番号
ST147	ST146	ST145	ST144	ST143	ST142	ST141	ST140	報告番号
円頂方柱基標	円頂方柱基標	円頂方柱基標	円頂方柱基標	円頂方柱基標	円頂方柱基標	円頂方柱基標	円頂方柱基標	種別
								全高
								最大幅
年五十才 (左面) 俗名サト 俗名サト三 年五十才	安政 (右面) 俗名登記行年一才 俗名登記行年一才 ○○葉用義 梅太立之 行年五六才 大正九年五月四日 釋光(○)信女 (右面) 明治四十年 三月十四日亡 ○○葉用義妻 俗名サト	左面 (右面) 俗名登記行年一才 俗名登記行年一才 ○○葉用義 梅太立之 行年五六才 大正九年五月四日 釋光(○)信女 (右面) 明治四十年 三月十四日亡 ○○葉用義妻 俗名サト	左面 (右面) 俗名登記行年一才 俗名登記行年一才 ○○葉用義 梅太立之 行年五六才 大正九年五月四日 釋光(○)信女 (右面) 明治四十年 三月十四日亡 ○○葉用義妻 俗名サト	左面 (右面) 俗名登記行年一才 俗名登記行年一才 ○○葉用義 梅太立之 行年五六才 大正九年五月四日 釋光(○)信女 (右面) 明治四十年 三月十四日亡 ○○葉用義妻 俗名サト	左面 (右面) 俗名登記行年一才 俗名登記行年一才 ○○葉用義 梅太立之 行年五六才 大正九年五月四日 釋光(○)信女 (右面) 明治四十年 三月十四日亡 ○○葉用義妻 俗名サト	左面 (右面) 俗名登記行年一才 俗名登記行年一才 ○○葉用義 梅太立之 行年五六才 大正九年五月四日 釋光(○)信女 (右面) 明治四十年 三月十四日亡 ○○葉用義妻 俗名サト	左面 (右面) 俗名登記行年一才 俗名登記行年一才 ○○葉用義 梅太立之 行年五六才 大正九年五月四日 釋光(○)信女 (右面) 明治四十年 三月十四日亡 ○○葉用義妻 俗名サト	銘文
1910	1921	1912	1838	1868	1839			備考

				32	32	持回番号	
ST125	ST124	ST123	ST122	ST121	ST120	報告番号	
方形 墓標	円頂 方柱墓標	円頂 方柱墓標	円頂 方柱墓標	一石三面印塔	一石三面印塔	種別	
				73.0	(64.5)	全高	
				(23.5)	(22.5)	最大幅	
○○仙次郎立之 口坐力 主	(右面) 上久○キヌタ (右面)口 上久○(治力)元年九月十三日 (左面)書名清助	(正面)御〇 (右面)文化十二年 (左面)五月十六日	(正面)御〇 (右面)寶祐三年十一月十七日 (左面)○○藤右エ門娘 世名右エ門行事年九十三才 三原故右エ門親忠父母	(正面)○○○女 寶祐三年十一月十七日 (右面)○○○信女 ○月口四 親忠妹口	(正面)○○○女 七月廿八日 (右面)○○○信女 ○月口四	(正面)延喜口 (一九)天 七月廿八日 (右面)永三丙戌	銘文
	頂部不明					相輪、九輪部上半から欠 相輪している。	
1868	1815	1743/1730	1750	1706	1674	西暦	

						持回番号	
ST132	ST131	ST130	ST129	ST128	ST127	報告番号	
円頂 方柱墓標	円頂 方柱墓標	円頂 方柱墓標	円頂 方柱墓標	円頂 方柱墓標	円頂 方柱墓標	種別	
						全高	
						最大幅	
年三十七才 左面)	(右面) 新尼〇〇信女 大正九年三月三日 モハ母	(右面) 御〇 右面)明治廿一年 十月四日 〇〇才一	(右面) 御〇 大正四年 十一月廿日 行年三十五才 〇〇初生父亦名フサ夫	(右面) 御〇 大正四年 十一月廿日 〇〇才一 行年三十五才 〇〇初生父亦名フサ夫	(右面) 御〇 大正九年五 月廿六日 〇〇才一 行年三十五才 〇〇初生父亦名フサ夫	(右面) 御〇 大正九年五 月廿六日 〇〇才一 行年三十五才 〇〇初生父亦名フサ夫	銘文
						備考	
1920	1899	1915	1931	1912	1830	西暦	

									持回番号
ST92	ST91	ST90	ST89	ST88	ST87	ST86	ST85	ST84	報告番号
方 形 墓 標	円頂 方 形 墓 標	円頂 方 形 墓 標	円頂 方 柱 墓 標	円頂 方 形 墓 標	円頂 方 形 墓 標	円頂 方 形 墓 標	円頂 方 柱 墓 標	方柱 墓 標	種別
									全高
									最大幅
(左面) 俗名元能立 地主良立	(正面) ○○○○信士 (右面) 文政九年 十月廿八日	(左面) ○○○○信士 (右面) 喜大郎子井市門	(正面) ○○○○信士 (右面) 天保十五年 十一月一日	(正面) ○○○○信士 (右面) 天保十一年 十一月一日	(正面) ○○○○信士 (右面) 天保十二年 十一月十五日	(正面) ○○○○信士 (右面) 天保十三年 十一月二十五日	(正面) ○○○○信士 (右面) 天保十四年 十一月二十六日	(正面) ○○○○信士 (右面) 天保十五年 十一月二十七日	銘文
埋没 頂部形態不明								頂部形態不明	備考
1826	1844	1892	1812	1841	1856	1806	1827	西暦	

									持回番号
ST100	ST99	ST98	ST97	ST96	ST95	ST94	ST93	報告番号	
円頂 方 形 墓 標	円頂 方 形 墓 標	円頂 方 形 墓 標	円頂 方 柱 墓 標	円頂 方 形 墓 標	円頂 方 形 墓 標	円頂 方 柱 墓 標	円頂 方 形 墓 標	圓頂方柱墓標	種別
									全高
									最大幅
(左面) 手輔泰右門	(正面) ○○○○信女 (右面) 「	(右面) ○○○○信女 (左面) 彦六月立	(正面) ○○○○信女 (右面) 彦六月立	(正面) ○○○○信女 (右面) 彦六月立	(正面) ○○○○信士 (右面) 安政七年 三月八日	(正面) ○○○○信士 (右面) 安政七年 三月八日	(正面) ○○○○信士 (右面) 安政七年 三月八日	(正面) ○○○○信士 (右面) 天保十一年 六月立	銘文
									備考
1806	1858			1860	1809	1841	1841	西暦	

										拝団番号	
ST76	ST75	ST74	ST73	ST72	ST71	ST70	ST69	ST68	ST67	報告番号	
円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	地蔵	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	種別	
										全高	
										最大幅	
(左面) ○○林立之 正月二十九日 姓○○重女 (右面) 正月廿九日 俗名おかん	(左面) ○○屋竹右門 行年四十一才 子母大立之	(正面) 紙〇〇 天保九戊戌 四月廿一日 (右面) 安政三年 ○○屋林平母 行年五十三才	(正面) 紙〇〇 天保九戊戌 四月十一日 (左面) ○○屋竹右門 行年四十一才 子母大立之	(正面) 紙〇〇 天保九戊戌 七月十五日 (右面) ○○屋林平母 行年五十五才 キツツ夫	(正面) 紙〇〇 天保九戊戌 七月十八日 (右面) ○○屋林平母 行年五十三才 キツツ夫	(正面) 紙〇〇 文久元申 三月十三日 (左面) ○○屋林平母 行年五十五才 キツツ夫	(正面) 紙〇〇 文久元申 三月十三日 (左面) ○○屋林平母 行年五十三才 キツツ夫	(正面) 紙〇〇 寛政四年 三月十八日 (右面) ○○屋林平母 行年五十三才 キツツ夫	(正面) 紙〇〇 寛政四年 三月十八日 (右面) ○○屋林平母 行年五十三才 キツツ夫	(正面) 紙〇〇 寛政四年 三月十八日 (右面) ○○屋林平母 行年五十三才 キツツ夫	銘文
1805	1856		1838	1893	1860	1792	1792	1861	1799	西暦	

										拝団番号
ST83	ST82	ST81	ST80	ST79	ST78	ST77				報告番号
円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	種別
										全高
										最大幅
(左面) ○○屋林平母 行年六才 元徳元吉	(正面) 紙〇〇 天保九戊戌 六月十一日 (右面) 基水西 行年三才	(正面) 紙〇〇 天保九戊戌 六月十一日 (右面) ○○屋林平母 行年六才	(正面) 紙〇〇 天保九戊戌 三月十二日 (右面) ○○屋林平母 行年三十三才	銘文						
1849/1865	1863		1906	1810	1849	1832	1802			西暦

								摘要	
ST58	ST57	ST56	ST55	ST54	ST53	ST52	ST51	報告番号	
円筒方形基標	円筒方柱基標	円筒方柱基標	円筒方形基標	円筒方柱基標	円筒方形基標	円筒方柱基標	円筒方形基標	種別	
								全高	
								最大幅	
(正面) 累〇〇 左面) 寛政二年 右面) 十月十九日 為八子町太良事	(正面) 累〇〇 左面) 宽政元年 右面) 九月廿一日 俗名清助	(正面) 累〇〇 左面) 文政十七年 右面) 四月八日 為八子町之助事	(正面) 累〇〇 左面) 天保十九年 右面) 八月廿二日 又七事	(正面) ○○活女 左面) 俗名又七 右面) 天保十六年八月廿九 安慶	(正面) ○○活士 左面) 木作一 右面) 俗名龜無 又七事	(正面) 天保十九年八月廿九 左面) 俗名又七 右面) 八月廿二日 又七事	(正面) 累〇〇 左面) 俗名清平 右面) 一月廿九 俗名清助	(正面) 累〇〇 左面) 俗名清平 右面) 一月廿九 俗名清助	路文
1790	1783	1824	1799	1784/1786	1838	1830	1782	西歷	

									擇回番号	
ST50	ST49	ST48	ST47	ST46	ST45	ST44	ST43	ST42	ST41 報告番号	
円頂方柱基標	円頂方柱基標	円頂方柱基標	地蔵	地蔵	円頂方柱基標	円頂方柱基標	円頂方柱基標	地蔵	円頂方柱基標 種別	
									全高	
									最大幅	
(正面) 安政 右面) 實政十 左面) 三月廿日 背面) 大工藤藏 右面) 信女	(正面) 口○○○ 右面) 安永五丙申 左面) 七月十九日 背面) 谷名貞助 右面) 〇〇才四良立之	(正面) 右○ 右面) 貞政三 左面) 〇〇才四良立之	(正面) 上凸口 右面) 〇〇才四良立之	(正面) 明和七 右面) 又四良子 左面) 五月四日 背面) ○〇輩女 右面) 安永九子 左面) 三月廿日 背面) 麻糸〇○清羅	(正面) 「 右面) 安永九子 左面) 一 背面) 十月六日 右面) 宏道 左面) 〇〇才四良立之	(正面) 折口〇 右面) 安永七丙天 左面) 十口(月立) 背面) 六日	(正面) ○ 右面) ○〇才四良立之 左面) 〇〇才四良立之	(正面) ○ 右面) ○〇才四良立之 左面) 〇〇才四良立之	(正面) ○ 右面) ○〇才四良立之 左面) 〇〇才四良立之	銘文
ライ									備考	
1799	1776	1791	1770	1780	1780	1778	1779	1780	西暦	

26	26	31	26	27	27	29		26	29	31	29	29	26	博団番号
SE136	SE135	SE134	SE133	SE132	SE131	SE130	SE129	SE128	SE127	SE126	SE125	SE124	SE123	報告番号
一石宝箋印塔	一石宝箋印塔	舟形光背基標	一石宝箋印塔	一石五輪塔	一石五輪塔	(相參)	一石宝箋印塔	一石宝箋印塔	無縫塔	(因)	組合せ宝箋印塔	(空)	組合せ宝箋印塔	一石宝箋印塔
(33.5)	(46.0)	(52.0)	(34.0)	19.5	54.0	37.5		(37.0)	63.5	(63.5)	20.5	30.5	(26.0)	全 高
(17.5)	(18.5)	(36.0)	(16.0)	15.5	12.5	18.0		(15.5)	21.5	26.0	32.0	46.5	(18.0)	最大幅
十月六日 午後	○○雙女 位	正圓 露表十三口	(正面) (次)金印 (上)夢 (下)懸 蓋位					(正面) 口 ○ 月九日	(正面) 口 ○ 月九日	長十八天				梵文
に諸花のみ残存。 相輪欠損。	相輪欠損。 下端にはモチを持つ。 に蓮井が附される。	下端にはモチを持つ。 下部には次第に 相輪のみ、先端及び九輪	空葉輪のみ残存。	空葉輪のみ残存。	下端にはモチを持つ。 伏鉢の上に支茎が巡る。 諸花なし。	5枚岩筋内 下は埋没。	相輪の九輪部分よりも上は 欠損。	下端にはモチを持つ。	下端にはモチを持つ。	下端にはモチを持つ。	下端にはモチを持つ。	下端にはモチを持つ。	下端にはモチを持つ。	軒下に講花
														備 考
														西 横
		1608							1613					

26	27	26	25	29	29	28	25	27	28	28	28	29	27	搏団番号	
SE92	SE91	SE90	SE89	SE88	SE87	SE86	SE85	SE84	SE83	SE82	SE81	SE80	SE79	報告番号	
一石半圓印塔	一石五輪塔	一石半圓印塔	一石半圓印塔	(B) 相合せ宝篋印塔	相合せ宝篋印塔 (相輪)	一石半圓印塔	一石五輪塔	一石半圓印塔	相合せ宝篋印塔 (相輪)	相合せ宝篋印塔 (相輪)	相合せ宝篋印塔 (相輪)	相合せ宝篋印塔 (相輪)	一石五輪塔	種別	
(60.0)	(55.0)	92.5	(55.0)	25.5	21.0	(47.5)	(61.5)	(73.0)	(68.0)	(39.0)	(49.0)	21.0	55.0	全高	
245	20.0	(26.0)	(25.0)	40.5	350	18.0	(26.0)	18.5	25.0	18.0	20.0	34.0	17.0	最大幅	
四月 正月 慶長八年 五月廿五日	」 正月 慶長八年 五月一日	」 正月 慶長八年 五月二十日	」 正月 慶長八年 五月二十八日	」 正月 慶長八年 五月二十九日	」 正月 慶長八年 五月三十日	」 正月 慶長八年 五月三十一日	」 正月 慶長八年 五月廿八日	」 正月 慶長八年 五月廿九日	」 正月 慶長八年 五月三十日	」 正月 慶長八年 五月三十一日	」 正月 慶長八年 五月廿九日	」 正月 慶長八年 五月三十日	」 正月 慶長八年 五月三十一日	正月 慶長八年 五月三十日	銘文
輪上部欠損 塔身に梵字モリーカ・相 空腹輪欠損 キリーカ				相輪欠損			軒下に講花	軒下に講花	下端にはモチ持つ。	相輪上部欠損	オオバタク	宝珠先端欠損	下半部欠損	軒下に講花を持つ。 オオバタク石 才オバタク 空腹輪・水輪損 軒下に講花を持たない。	備考
輪上部欠損 塔身に梵字モリーカ・相 空腹輪欠損 キリーカ															西暦
1605		1613						1607	1603						

27	25	27	25	25	25	27	29	25	24	27	24	28	30	博団番号
SE49	SE48	SE47	SE46	SE45	SE44	SE43	SE42	SE41	SE40	SE39	SE38	SE37	SE36	報告番号
一 石 五 輪 塔	一 石 宝 瓶 印 塔	一 石 五 輪 塔	一 石 宝 瓶 印 塔	一 石 宝 瓶 印 塔	一 石 五 輪 塔	組合せ 一 石 宝 瓶 印 塔	(3)	一 石 宝 瓶 印 塔	一 石 五 輪 塔	一 石 宝 瓶 印 塔	一 石 五 輪 塔	組合せ 一 石 宝 瓶 印 塔	(3)	種 別
590	540	745	(305)	(61.0)	(91.5)	(34.5)	27.0	(63.5)	625	(33.5)	(91.0)	(24.0)	17.0	全 高
145	(24.0)	200	150	(24.0)	(24.0)	14.0	440	(25.5)	155	14.5	28.0	20.0	17.0	最大幅
正 面 口 二 月 六 日	正 面 口 正 面 三 月 三 日	正 面 口 正 面 一 年 三 月 三 日	正 面 口 正 面 一 年 四 月 二 十九 日	正 面 口 正 面 一 年 四 月 四 日	梵字キリーグ									
塔身に梵字キリーグ	火輪に梵字キリーグ	相輪のみ残存	塔身下半部以下欠損	塔身に梵字キリーグ	火輪に梵字キリーグ	空風輪欠損 火輪に梵字キリーグ?		九輪部より上は欠損	塔身に梵字	火輪に梵字		九輪部より上は欠損		備 考
	1608										1617			西 暦

24	28	24	24	30	28	24	博図番号
SE7	SE6	SE5	SE4	SE3	SE2	SE1	報告番号
一石半箋印塔 (相參)	組合せ半箋印塔	一石半箋印塔	一石半箋印塔 (七題)	組合せ半箋印塔 (相參)	組合せ半箋印塔 (相參)	一石半箋印塔	種別
(64.0) (33.0)	(60.0)	(53.0)	8.5	(54.5)	(66.5)	全高	
(240)	17.2	(21.5)	(25.5)	46.0	19.0	27.0	最大幅
(正面) 「四角□□」定門	(正面) 三月廿二日 丁未	(正面) 慶次六天 ○○○○○○					説文
			相輪欠損	上面外周に菱花を持つ。 中央に一寸34mmの基礎部。	頂部と4つ間があり、古式のものと思われる。 相輪は伏鉢上部から欠損。		備考
		1603					西署

栎畠谷地区

字甚光院墓地 南東側斜面の石造物

16	16	拂因号码
23	22	報告番号
円頂方形基標	円頂方形基標	種別
48.0	49.5	全高
20.0	21.0	最大幅
左面 正面 安永戊戌 一月廿八日 石碑七事 ヨンソニ立文	右面 正面 明和六年 九月三日 〇〇年次良立	銘文
00000 信士	〇〇〇〇〇 信女	
		備考
基標中央部が削り込みによつて持取られ、その下に謝表が彫られてゐる。ほどあり。	基標中央部が削り込みによつて持取られ、その下に謝表が彫られてゐる。ほどあり。	
1778	1769	西壁

15	15	15	拂因番号
3	2	1	報告番号
一石三箇印塔	一石三箇印塔	一石三箇印塔	種別
(66.0)	(73.5)	(90.0)	全高
(26.5)	26.5	(26.0)	最大幅
(元) (元) 元符七度 口當口口信士 日月廿八日	(元) (元) 元符〇〇土	(元) (元) 元符七度 口當口口信士	説文
「唐身正面には△の中に 「空」と刻まれている。」			備考
		1694	西壁

石銀地区 墓Vの石造物

石銀地区 墓Ⅲ東の石造物

10	10	10	10	10	10	拂回署号
6	5	4	3	2	1	報告番号
円頂方柱基標	舟形光背基標	一石宝箋印塔	地藏	一石宝箋印塔	一石宝箋印塔	種別
33.5	(20.0)	(75.0)	(45.2)	(90.0)	(74.0)	全高
18.5	22.0	21.0	(30.7)	245	24.5	最大幅
四月三十日 □□〇〇〇〇	上「 「 上久須」 □□(定力)	○元様六口 六月廿	口口空	貞享五戊辰 二月初九日 ○壹	銘文	
嘉慶五子七月六日						
相輪は十三に折れている	相輪は十三に重ねておる。	相輪に「法」、「五」 「圓」、「塔身に「寶瓶」 「圓」、「圓」	相輪に「法」、「僧」、「五」 「圓」、「塔身に「寶瓶」、「圓」、「圓」	相輪に「法」、「僧」、「五」 「圓」、「塔身に「寶瓶」、「圓」、「圓」	相輪に「法」、「僧」、「五」 「圓」、「塔身に「寶瓶」、「圓」、「圓」	備考
基標中央部を切り込みによつて取り外されてしまふ。頭部は四面とも丸みを持つ。	外周輪輪を手離せながらせっている。下端に落井が能らる。下端にはそれ。	基標中央部を切り込みによつて取り外されてしまふ。頭部は四面とも丸みを持つ。	基標中央部を切り込みによつて取り外されてしまふ。頭部は四面とも丸みを持つ。	基標中央部を切り込みによつて取り外されてしまふ。頭部は四面とも丸みを持つ。	基標中央部を切り込みによつて取り外されてしまふ。頭部は四面とも丸みを持つ。	西 麗
	1720	1693			1688	

石銀地区 墓IVの石造物

12	12	博団番号
2	1	報告番号
円頂六角柱基盤	一石五種塔	種別
64	770	全高
34	205	最大幅
正面 右面 左面 俗名 ○生四郎	梵字 口口音塔 慶長八年 三月三日 造立位	銘文
主屋主 一丁主 五月廿日 日	」土	
台座をどもな く。講義のある		備考
1762	1603	西暦

第4表 石造物一覧表

石銀地区 墓II東の石造物

8	8	8	8	8	持回番号
5	4	3	2	1	報告番号
(B) 組合せ玉印塔 （蓋）	組合せ玉印塔 （箱蓋）	宝篋印塔 （箱蓋）	一石宝篋印塔	一石宝篋印塔	種別
17.5	26.0	(32.0)	(92.5)	(65.0)	全高
31.0	26.5		25.0	(25.0)	最大幅
			□水八口 「」〇事 「」月六「」	□水 「」 月廿八日 「」	铭文
			「漢」	相輪に「妙法」、笠に 「漢」	備考
		る。	相輪部の下端に突起が透 る。		
		らと同一石塔の部材か。			西壁

6	6	6	6	6	持回番号	
13	12	11	10	9	報告番号	
(本題) 組合せ宝篋印塔	(基礎) 組合せ宝篋印塔	(本題) 組合せ宝篋印塔	一石三箇印塔	一石三箇印塔	種別	
(320)	(145)	(39.5)	93.5	93.5	全高	
36.8	(32.0)	(17.0)	(22.5)	26.0	最大幅	
六月十八日 慶長廿 口年九 月廿九日	石塔「下穴」 考子「下穴」 「下穴」 普門院九日	三口「下穴」 「下穴」 「下穴」	[] [] [] [] [] []	[] [] [] [] [] []	寛文九年	銘文
損 耗	上面に蓮瓣を刻り込んだ 反花座がある。下部は欠	軒は欠損。 部材が 3つに割れてい る。上下 とも欠損。	軒は欠損。 部材が 3つに割れてい る。上下 とも欠損。	相輪に「妙法」、笠に 「蓮」、塔身に「華」、基 礎に「基」	参考	
1615			12と同一石塔		西壁	

報告書抄録

ふりがな	いわみぎんざんいせきせきぞうぶつちょうさはうこくしょ		
書名	石見銀山遺跡石造物調査報告書		
副書名	石銀地区 墓I・墓II東・墓III東・墓IV・墓Vの石造物調査 柄畠谷地区 字甚光院の石造物調査		
卷次			
シリーズ名	石見銀山遺跡石造物調査報告書		
シリーズ番号	15		
編執筆者	東山信治		
編集機関	島根県教育委員会・大田市教育委員会		
所在地	〒690-8502 島根県松江市殿町1番地 TEL 0852-22-5642 〒694-0064 島根県大田市大田町大田口1111番地 TEL 0854-82-1600		
発行機関	島根県教育委員会		
発行年月	2015年3月		
調査原因	石見銀山遺跡総合調査		
名称	所在地	主な時代	石造物
石銀地区墓I	大田市大森町	江戸時代前期	一石宝篋印塔、一石五輪塔、組合せ宝篋印塔
石銀地区墓II東	大田市大森町	江戸時代前期	一石宝篋印塔、組合せ宝篋印塔
石銀地区墓III東	大田市大森町	江戸時代前期～中期	一石宝篋印塔、円頂方柱墓標、光背形墓標、地蔵
石銀地区墓IV	大田市大森町	江戸時代前期～中期	一石宝篋印塔、一石五輪塔、組合せ宝篋印塔、無縫塔、円頂六角柱墓標、地蔵
石銀地区墓V	大田市大森町	江戸時代中期	一石宝篋印塔、一石五輪塔、組合せ宝篋印塔、組合せ五輪塔、位牌型墓標、円頂方形墓標、円頂方柱墓標、円頂六角柱墓標、地蔵
柄畠谷地区字甚光院	大田市大森町	安土桃山時代～近代	一石宝篋印塔、一石五輪塔、組合せ宝篋印塔、組合せ五輪塔、無縫塔、円頂方形墓標、円頂方柱墓標、突頂方柱墓標、平頂方柱墓標、光背形墓標、地蔵

石見銀山遺跡石造物調査報告書15

— 石銀地区 墓I・墓II東・墓III東・ —

墓IV・墓Vの石造物調査

— 楊畠谷地区 宇喜光院の石造物調査 —

平成27(2015)年3月

編 集 島根県教育委員会／大田市教育委員会
松江市殿町1番地／大田市大田町大田口1111番地

発 行 島根県教育委員会
松江市殿町1番地

URL <http://www.pref.shimane.lg.jp/sekaiisan/>

印 刷 有限会社 松陽印刷所
